

CONTENTS

自作自演172 亀井暁子・鳥海宏太・横関 浩・寺下 浩 2

最終回 まちの風景
魅力あるまちの風景にむけて 大影佳史 4

第5回 インドの都市から考える
動物のいる都市空間 柳沢 究 6

新連載 自然・人間・建築と環境
自然観を検める 宿谷昌則 8

第20回 JIA 東海学生卒業設計コンクール2013 入賞作品 10

総評 古谷誠章

金賞 戸谷奈貴

銀賞 鈴木理咲子、福田晃司

佳作 西里正敏、大岩良平、千葉基博

講評 古谷誠章、鈴木幸治、廣瀬高保、山田高志、川口亜稀子、植野 収

審査によせて 吉川法人 15

第1回 JIA 東海住宅建築賞 第1次公開審査結果 伊藤恭行 16

2013年度 JIA 本部通常総会レポート 尾林孝雄 18

保存情報 第141回 旧湊屋店舗兼主屋・土蔵 谷 進 19

小野田家住宅 山上 薫 19

理事会レポート 鳥居久保 20

東海支部役員会報告 鈴木慶智 21

東海とっておきガイド⑤⑦ 岐阜編 小塚昭幸 22

地域会だより 22

暑中広告 23

編集後記 西出 章・酒井直子 24

映画の中の建築 ⑤

新発田市民文化会館



新進気鋭の建築家が主人公だが、スタッフの若い女性と愛人関係に入り、奥さん、子どもと別居し、一方で美しい人妻と恋に落ちるといふ何とも羨ましい、いや男の悲しい性を描いた物語だ。原作は渡辺淳一で、そんな優柔不断な中年男を津川雅彦が映画「ひとひらの雪」(1985年、根岸吉太郎監督)で好演している。適役だ。秋吉久美子もいい。

ところでこの映画の不思議なことは、主人公の建築家が設計した建物が「新発田市民文化会館(1980年、内井昭蔵設計)」だったり「伊豆の長八美術館(1984年、石山修武設計)」だったりすることだ。このまったく異質の建築を同一の設計者にするなんて映画界は何て不見識だと思った。しかし、ふと思いついてみれば、建築もまた毎回違うクライアントに巡り合い、恋をし、クライアントの色に染まりながら作品をつくり上げ別れていく。二つの異質な建築を一人の設計者に設定することにより、男の浮気性を際立たせ、建築もまた「ひとひらの雪」のようなものだと言いたかったとしたら、ちょっと皮肉っぽいではないか。

最後、男は3人の女性を同時に失うことになる。が、決して暗くはない。また来年もひとひらの雪は舞うのだろう。

光崎敏正 | 愛知地域会





亀井 暁子 (JIA静岡)

静岡文化芸術大学 (浜松市中区中央2-1-1 TEL 053-457-6231 FAX 053-457-6210)

こどもの空間構想力

4月に九州支部・福岡より移動してまいりました。

昨秋、FUKUOKAデザインリーグによる「デザインスクールキャラバン」に参加させていただく機会がありました。これはいわば「デザインの出前授業」で、小学校へデザイナーが講師として赴き、具体的敷地とテーマに沿って小学生がまちづくりを行う(まちを考えて形にする)体験を指導するものです。講師は、JIA福岡会、JAGDA、JCD、SDA、DSAなど各デザイン団体に所属の地元会員たち。それぞれの専門性を生かしながら、子どもたちの街づくりが形になるよう助けます。テーマに対し考えた街を子どもたちがつくる…どうなることか?とっていたら、子どもたちの豊かな空間構想力と創ることへの意欲に驚かされる、という嬉しい経験がありました。制作中も、リーダーシップを取る子、自分の世界に入りひたすら制作に徹する子など、それぞれの個性が発揮されながら、子どもたちの空間構想が形になってゆきます。子どもたちの、楽しみながら、自分らしく表現しようという姿勢はとてすがすがしく、このような天性の素養を形に結び付けることへの指導は、難しいながらも興味深い体験でした。(総指揮をとって下さいましたJIA福岡会の水野さん、ありがとうございました)



鳥海 宏太 (JIA愛知)

日建設計 (名古屋市中区栄4-15-32 TEL 052-261-6131 FAX 052-252-7295)

繊細な感覚を刺激する設計とは

登山をすると水、食事の美味しさを実感します。失われた水分と、澄んだ空気の中での呼吸のおかげかもしれません。個人的には高価な料理、手の込んだ料理より、自身の味覚の変化からくる食の美味しさの方がしっくりきます。いかにおいしく食事できる身体をキープするか。

澄んだ空気の屋外で体を動かし食することが幸福感なのであれば、建築の設計をしている自分は何ができるのか?と登山をしながら考えることがあります。特に執務空間はあらゆるパラメーターがコントロールされ、一年を通して快適な環境に保つことが求められます。社会活動をする上で必要不可欠な場所です。ただし、これからの違いが求められる時代において他者との違いを生み出すものの大きな要素として、「身体的な鋭さ」、変化を感じ取れる力があると考えます。これは良い、これは悪い、あの人はこう考えている、社会はこれを求めているなど、他者が感じ取らない微細なものから敏感に感じ取ることができるか。

快適な空間で過ごす一日では、自らの変化に気づくことも鈍感になります。どのように身体に刺激を与え、繊細な感覚をキープできる仕掛けを建物に内包するか、設計の大きなテーマであります。

その建物を目指すため、今日も歩き、走り、登り、身体を動かします。



横関 浩 (JIA 愛知)

STANDS ARCHITECTS (名古屋市中区千代田1-10-28 IB303 TEL 052-243-0657 FAX 052-243-0658)

らしさを生む関係性

最近、古建築、現代建築、地域まちづくり、植生、アートなど、さまざまな活動にさまざまなレベルでかかわらせていただいています。興味のあるものに手当たり次第、頭を突っ込んでしまった結果なのですが…。ところでいろいろやっていると、どの活動にも共通する、法則というか、関係性の構造のようなものが見えてきます。例えば、古い町並みを見て歩くと、全体としては一つの町並みイメージを持っているのですが、一軒一軒は表情が異なる多様な建物として出来上がっている。ところがこの全体のイメージ、他の町並みと比較すると、それぞれ個性があり多様な状態になってしまう。より大きな 地方レベルではまた共通なイメージが見えてきて…。

単純なシステム→複雑な単体状況→単純なグループイメージ→複雑なグループ単体状況→単純なより大きなグループイメージ→…このような構造は、何にでもあるのですが、よくよく考えたらかなり不思議なことです。何か世界は共通のパターンを持っているのかと思いたくもなる。そうなると思ってくるのが上記の「→」の部分。単純なシステムが複雑な単体状況、複雑な単体状況が単純なグループイメージとなるのはなぜか。

最近かかわっている運河の植生調査では、運河沿いの建物、水の位置、植物が生息できる場所の広さ、土壌、種を運ぶ生態系の存在などによって植生の多様性が発生していることが分かります。このような関係性の構造が「→」であり、多様性ととも、固有性をも生み出しているとするれば、その場所らしい何かをつくりたいとき、どのような関係性をつくり出すか、もしくは守れば良いかに注意すれば良いのではないかと。関係性のあり方がより強く問われるようになった現代。しばらくは関係性を見つけ出し、応用していく設計や活動をしていきたいと思っています。



寺下 浩 (JIA 岐阜)

smilo / 寺下浩一級建築士事務所 (名古屋市中村区大日町1-5 2F-B TEL 052-481-0388 FAX 052-481-0384)

脳を柔らかく…

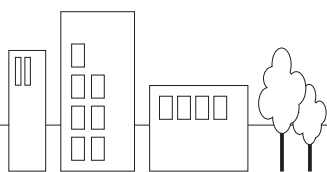
昨年、岐阜県郡上市の「古今伝授の里フィールドミュージアム」において、毎年秋に開催されている「歌となる言葉とかたち展」に造形作家として参加しました。この展覧会は歌人が詠んだ短歌の世界を造形作家が作品で表現、ミュージアムの屋内外に展示するというコラボレーション形式の展覧会です。

友人からの誘いで気軽に引き受けたものの、短歌の組み合わせが決まってから造形作品のイメージが固まるまで随分と悩んでしまいました。普段クライアントの要望に耳を傾け、厳しい条件の中、最大限具現化していく設計とは異なり、短歌に込められた情景を自由に解釈し作品を創ることの難しさ！ また自分の発想力のなさと、20代、30代の頃からは確実に脳が固まっていることを改めて実感しました。

ミュージアムの敷地に何度か通り、作品の設置場所を厳選することで手掛かりを得、歌とかたちに通ずるキーワードを設定し、なんとか作品を完成させることができました。

無に近い状況から作品を制作する生みの苦しみ、創る楽しさ、短歌の奥深い世界にも魅了され、今年も参加する予定です。17回目を迎える今秋の展覧会、紅葉深まる古今伝授の里にぜひお越しください。 [earthborn]





魅力あるまちの風景にむけて

大影佳史 | 名城大学理工学部環境創造学科 准教授

これまで、日頃感じている問題意識や課題について、思うまま書かせていただいた。最終回も同様、建築・都市の課題として、屋外の公共空間の形成に関して、思うところを記したいと思う。



前は、さいごに、広重の四条河原夕涼の絵図(図1)をあげた。移ろう自然環境との呼応の様子という観点からであったが、具体的にまちの風景、屋外の公共空間を魅力あるものにするための方法を考える上でも興味深く、ヒントがあるように思う(ちなみに、第3回でも触れたが、この絵図のような様子は現代の納涼床として継承されていると見ることができる)。

ここで注目したいのは、ひとつには、場所のつくられ方が仮設的であること、もうひとつはこの場所の形成に、多くの人々がかかわっているという点である(多くの人々のアクション、働きかけにより、全体としての環境が形成されており、それにより動的で魅力的な環境が形成されている)。

まちの風景を豊にする要素のひとつとして、人々のさまざまなアクティビティは

欠かせない(第2回では、現代の都市空間において屋外でのアクティビティが奪われている状況に触れた)が、考えてみれば、日本のまちでは、まつりや市などもそうであるが、仮設的に場所をしつらえることにより、さまざまなアクティビティを実現してきた。そのような仮設的な場所づくり、場所の生成が、まちの風景を豊かにしてきたともいえる。

かつての日本の都市空間については、たとえば、一時的な境界空間としての「ひろろぎ空間」や、時間を軸とした空間構成としての「さおび」という概念の存在など、時間的な流れを含んだ空間形成の考え方について、先人がなしてきた、空間のつくりかた、またその元にある考え方におおいに学ぶものがある¹⁾。

また、多くの人々が場所の形成にかかわるといえる点に関して、寺社仏閣をはじめ、共同体のなかで、多くの人がかかわることによって空間や場所づくりがなされる、そんな事例は、かつては珍しいものではなかった。

今や、何をつくるかということのほか、どのようにしてつくるかというプロセスも、おそらくは持続可能な環境にもつな

がる重要な課題になっているのではないかと思える。

そんな思いや観点をもとに、これまで筆者のかかわった提案、事例を紹介したい。

写真1、2および図2は、一昨年、名古屋市の久屋大通公園の将来を考えるワークショップ参加に際して、研究室で提案した、久屋大通公園の将来像である。

現在の久屋大通公園および周辺に関して、車道、歩道、民地、公園の物理的な境界を取り払い、緑の大地として一体化する構想である。常に市民が場づくりにかかわっている状況、動的な空間としての公共空間がつくり出せればと考えた。

仮設的、ダイナミックに場所をしつらえる手法、みんなで場所づくりにかかわる仕組み、そんなところをテーマのひとつとしたものである。

「みんなでつくり続ける水と緑の大地～久屋大通～」とタイトルをつけたが、公共空間づくりの枠組み自体を捉え直すことも意図したものである。

写真3および図3は、2005年日本国際博覧会(愛知万博)に際して、瀬戸会場に



図1 京都名所の内「四条河原夕涼」(第5回より再掲)



写真1・2 「みんなでつくり続ける水と緑の大地～久屋大通～」提案模型



写真3 愛知万博・瀬戸会場「竹の日よけ」

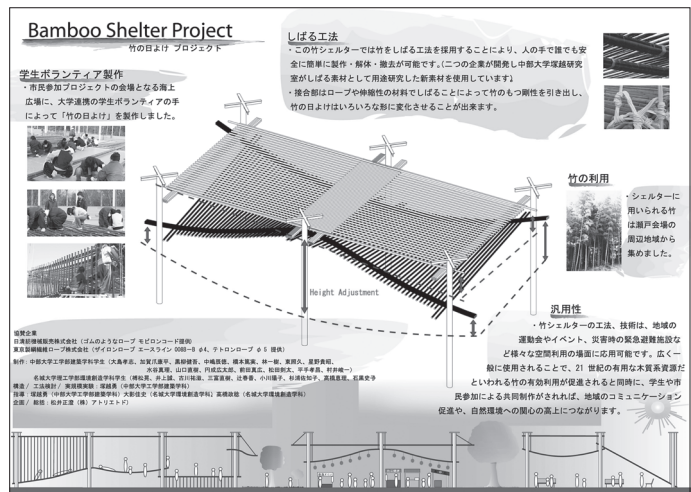


図3 愛知万博・瀬戸会場「竹の日よけ」提案

て作成された「竹の日よけ」である。

愛知万博は市民や非営利団体・非政府組織などが、計画立案や運営に参加できる市民参加型万博として、2005年3月～9月の185日間開催されたが、本案は、当博覧会において、21世紀の有用な木質系資源だといわれる竹の有効利用および参加型のデザインを提案し、市民参加プロジェクトの会場となる瀬戸会場の海上広場に「竹の日よけ」として実現したものである。

大学連携の学生ボランティアによりおよそ10日間にわたって会期前の海上広場で手作業により制作が行われ、185日間設

置の後、同学生たちの手によって解体された。

特に、市民の手でも安全に簡単に製作できること、制震性や耐久性など会期中安全性が保たれること、魅力的な空間が形成されること、汎用性のある提案とすること、材料は身近な地域(瀬戸会場周辺地域)から集めること、などが課題となった。

技術的な特徴としては、この構造物は、ロープや伸縮性の材料でしばることによってのみ、接合を行っている。竹をしばる工法を採用することにより、人の手で誰でも安全に簡単に製作・解体・撤去が可能となることを考えた。このような、空間づくりは農村歌舞伎の小屋掛けにもヒントを得たものである。

提案の背景には、まちのあちらこちらに、また山に、放置されている竹林の問題もある。建築的な空間づくりへとその利活用の幅を広げることも意図された。

万博というイベントでの実現であったが、提案としては、子どもの遊び場づくりや、市、まつりなど、地域の場づくりへの展開を図ったものである。

上記は事例であるが、このような、みんなで場所づくりにかかわる仕組み、仮想的、動的な場所づくり、空間づくりの手法を考えていくことは、

まちの風景をより魅力あるものにしていくアプローチのひとつであろうかと思う。

最近では、屋外での子どもの遊び場づくりにもかわりはじめた。これについては、またどこかで、紹介できる機会があればと思うが、そんなところからも、少しずつでもまちの風景を豊かなものにしていくことができればと思っている。



連載をふりかえってみると、あまりまとまりのあるものにはならなかったが、問題意識が共有できればとの思いからこのようになった。一部でも、何か引っかかるころがあったならば幸いである。

最後に、このような機会を与えてくださった関係の皆さま、これまで読んでくださった皆さまには、深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

参考文献

- 1) 日本の都市空間、都市デザイン研究体編、彰国社、1968



おおかけ・よしふみ | 京都市生まれ。京都大学大学院工学研究科建築学専攻博士後期課程(～1998.3)。京都大学大学院工学研究科助手(1998.4～)。博士(工学) 京都大学(2002.11)。名城大学理工学部講師(2003.4～)。同准教授(2007.4～)。一級建築士。作品に『京都大学総合博物館(南館)』『愛知万博瀬戸会場竹の日よけプロジェクト』。共著に『都市・建築の感性デザイン工学』『建築思潮05(漂流する風景・現代建築批判)』など。建築・都市・環境デザイン

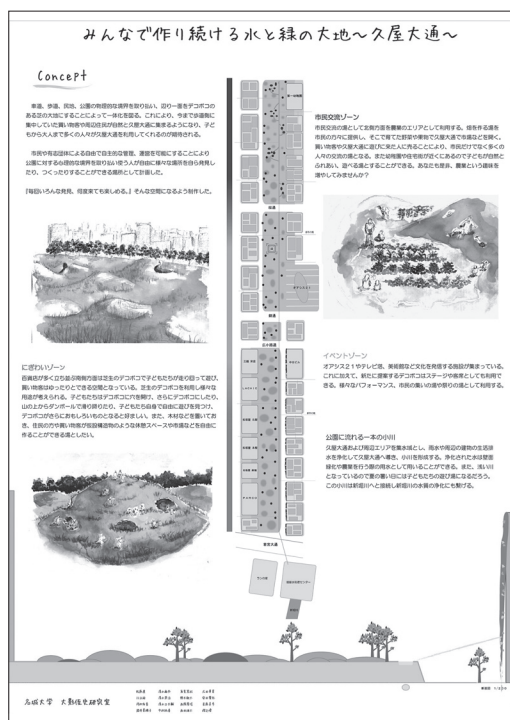


図2 「みんなで作り続ける水と緑の大地～久屋大通～」提案

インドの
都市から
考え
第 5 回

動物のいる都市空間



柳沢 究

名城大学理工学部建築学科 准教授

やなぎさわ・きわむ | 1975年横浜市生まれ。2001年京都大学大学院修了。2003年神戸芸術工科大学助手。2008年一級建築士事務所建築研究室設立。2012年より現職。博士(工学)作品:「斜庭の町家」「紫野の町家改修」[SAKAN Shell Structure]ほか。著書:「京都げのむ」「生きている文化遺産と観光」「無有」ほか。受賞:地域住宅計画賞、京都デザイン賞入選、雪のデザイン賞奨励賞、タキロン国際デザインコンペ2等ほか。

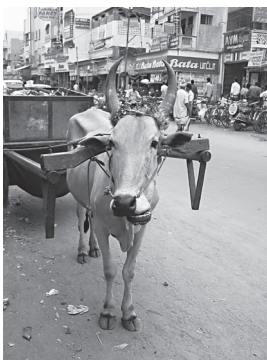


写真1: 街の中でゴミ収集車をひく牛



写真2: 牛小屋となった路地奥のスペース

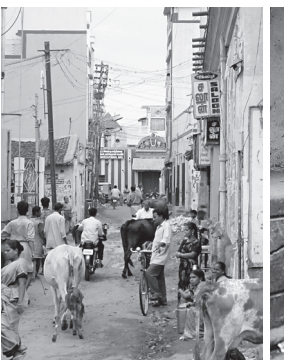


写真3: 人と牛が入り交じる街の風景

回 インドの都市には動物がいる

小鳥や人に連れられたペットを除けば、日本の都市部において動物を見かける機会はきわめて少なくなった。そんな日本からインドを訪れて驚くことの一つは、都市に動物があふれていることである。実にさまざまな動物たちが人間と生活・空間を共にしている。

インドの都市で出会う動物のツートップは、後で詳しく触れる牛と水牛である。山羊も多い。町外れでは豚やヒヨコをつれた鶏にも出くわす。暑い季節には死んだように寝転がる犬が目抜き通りに点々と並んでいる。猫は少ないが、電線を伝い屋根を渡り歩く猿は目立つ。家の窓を開けておくと猿に食べ物を盗られるので注意がいる。寺院では観光客相手のサービスを務めている象に出会う。ラクダは砂漠に近い地方都市では日常的な存在だ。

インドの人々の動物に対する接し方を見てみると、必ずしも両手を挙げて動物を歓迎し可愛がっているわけではない。迷惑に感じ邪険に扱うことも少なくないようである。しかし、それでも彼らを積極的に排除したりコントロールしようという姿勢はほとんど見られず、自分たちの生活空間に他の動物がいることを当たり前前に受け容れている。つい最近もムンバイの市民プールで泳ぐ猿が現れ話題になったが、利用者からは苦情もなく管理者側も猿を追い出さなかったという。根本には、命あるものは原則として平等な存在と考えるインド的な生命観があると言われる。人間の支配に従属する限りで存在を許される西洋的な動物=ペット観とは、大きく異なる。

回 牛と水牛

これらの動物の中でも牛は別格である。理由の一つはヒンドゥー教において牛が聖なる動物とされていることだ。シヴァ神の乗り物は白い牡牛であり、クリシュナ神は牛飼いの神である。周知のように牛肉は決して食べないが、ミルクやバターは重要な栄養源であり、その糞尿とあわせて宗教儀式にも欠かせない。糞はワラと混ぜて燃料となる。荷役としてもまだまだ現役である(写真1)。

かたや水牛は悪魔の乗り物であり、どちらかと言えば穢れた動物とされるが、ミルクの質は水牛の方が上等であり値も高いため、飼育数は多い。食のタブーはなく、インドから「牛肉」として輸出される水牛の肉は、いまや世界の牛肉シェアの1/4を占める。

インドにいる牛と水牛をあわせた数は3億頭超、世界一の牛大国である。都市に牛が多いのは、都市で牛を飼う搾乳業者(牛飼い)がいるからである。街区の奥の空地に(写真2)、あるいは住宅の小さな中庭や1階部分を利用して、数頭から十数頭の牛を飼っている。わざわざ都市で牛を飼うのは、農村部よりもミルクが高く売れるからである。かくしてインドの都市には牛(と水牛)がいる。高密度市街地を数多の牛たちが人や車と混じり悠々と歩いている様は、独特の都市風景といつてよい(写真3)。

回 牛の1日追跡調査

ヴェーラーナシーではこのような牛がごく普通に、電柱ほどの密度で街中に暮らしている。綱などはつけていない。あるとき思い立って牛の生活を調査してみることにした。夜明



写真4：ゴミ捨て場で食事をする牛（と犬）



写真5：道端での搾乳の様子

け頃街頭で眠る牛の1頭を選び、日没まで追跡し、その居場所と行動を記録するという方法である(右図)。これまでに6頭の調査をした。分かったのは以下のようなことだ。

牛によって決まった餌場が何カ所もあり、そこを巡回するのが生活の基本である。餌場は主にゴミ捨て場であり、残飯や食器となる植物の葉などを食べる(写真4)。定期的に餌をやる住民も多く、牛の方もそれを心得て玄関口を回っていく。そのほかに祠に供えられた花を食べたり、食生活はそれなりにバラエティーがある。

一つの小さな驚きは、一見野良牛と思われた牛にも家があったことである。特に雌牛は毎日家に帰り餌をもらい搾乳される(写真5)。そしてそれが済むと再び街頭に出る。要は都市の中で放牧されているのである。対して雄牛はどうやら野良牛が多い。野良牛になるに至った経緯は分からないが、文献によれば、儀式として放牛される場合もあれば、年老いて労役を免除され解放されることもあるという。使役される雄牛の多くは去勢されるが、追跡中に発情し交尾行為に及んだ雄牛もいたから、彼は前者のケースかもしれない。

大体30分ほど食事ツアーを行った後、道端に座り込み1~2時間の反芻と昼寝を行う。そして時折の排泄。糞は燃料として回収される。これを4~5セット繰り返して牛の1日は暮れる。行動範囲はおよそ100m四方。人間社会のコミュニティサイズと大体一致する、と言っては深読みだろうか。現代の都市において牛を基点とした見事な循環システム(人→廃棄物→牛→乳/糞→人)が成り立っている様子は、感動的ですらある。

この調査は想像していた以上に過酷で

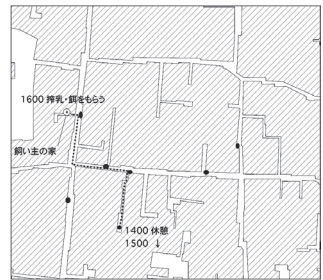
あった。牛がほとんど動かないからだ。数歩歩んでは1時間立ち止まる。大半の時間は睡眠か反芻に費やされる。はじめは退屈でたまらなかったが、動かない牛の側に座りその反芻する口元を何時間も見つめているうちに、なんだか自分が周囲の世界から遊離した別次元にトリップしていることに気がついた。牛は都市に

いるからといって人間のようには忙しくない。自然の中で暮らすのと同じペースで暮らしている。インドの都市のすさまじい喧騒の渦中であって、牛の周囲だけは緩やかな時間が流れていたのである。このことを体感できたことが、実は牛の追跡調査の最大の収穫である。

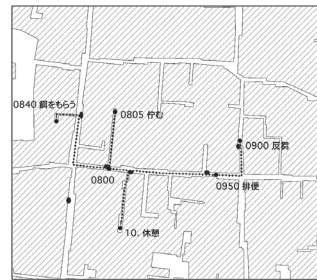
インドでも、都市からこういった動物を締め出すという動きはある。コルカタやムンバイの中心部で牛を見かけることはなくなった。デリーでも2010年に市街地整備の一環として、路上生活者などと共に牛も都市外へ追いやられた(2012年に訪れた際にはだいぶ戻っていた)。臭いや衛生面の問題が大きいだろう。交通への影響もある。しかし、世界の中に自分(人間)以外の存在が生きている、そのことを日常的に受けとめる機会が失われることは、人間にとって、それほど小さな問題ではないように思う。私事で恐縮だが、以前京都の古い町家に暮らしていたとき、天井裏を



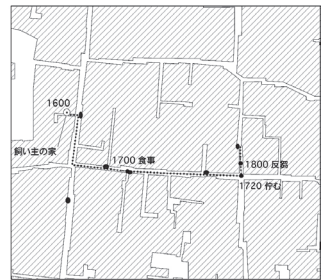
□ 06:00 - 08:00



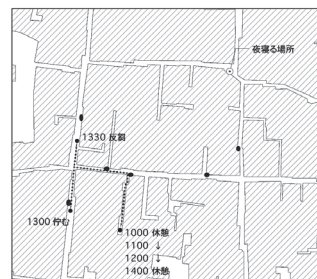
□ 14:00 - 16:00



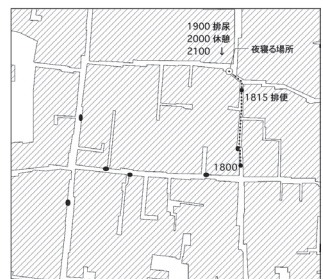
□ 08:00 - 10:00



□ 16:00 - 18:00



□ 10:00 - 12:00 - 14:00



□ 18:00 -



メス牛(年齢不詳) 1999/09/26 記録

図：牛の1日行動記録

ネズミや猫が走っていた。部屋の中にイタチがいたこともあれば、裏庭に蛇やたぬきも出た。田舎や少し昔なら普通だっただろうことがとても新鮮であった。もちろん気持ち悪さもあるが、一方で自分の住んでいる家が動物にとっても居場所になっていることに、少しの嬉しさをおぼえた。それらの動物たちが自分と同じ世界の住人であることを感じ、少し世界が広がった気がした。現代の住宅の天井裏や床下にネズミや蛇はいるだろうか。彼らを閉めだした住宅は、快適かもしれないが健全だろうか、という疑問は拭いきれない。

インドの都市に暮らす動物たちにとって、人間の都市が暮らしやすいものとは思えないけれど、今のところ何とかやっていけているようだ。動物がそれなりに生きていける都市というのは、人間にとってもたぶん悪くない住み心地なのではないかと思うが、どうだろうか。

●次回は10月号掲載です。

〈隔月6回連載〉

自然・人間・建築と環境

第1回

あらた 自然観を検める

宿谷昌則 | 東京都市大学環境学部環境創生学科 教授

地球の自然は、そこに生きる私たち人を含む生き物に対して、ときに厳しく振る舞う。冬の寒さや夏の暑さのような季節の変化も厳しくないことはないが、毎年どこかを襲う台風や豪雨・豪雪は厳しい。数年から十数年に1回、あるいは数十年に1回の頻度で現われる大きな地震や津波は並外れて厳しいことがある。これらを私たちは天災と呼んできた。

天災も自然の営みにほかならないから、これをなくすことは人間には不可能だ。しかし、天災となる自然現象を避けたり受け流したりする…それは可能だろう。そういう生き方・暮らし方を私たち人間が身につけることは、いつの時代にも重要であったに違いない。現代社会はもちろんその例外ではないはずだ。

ところが、自然についての科学的な見方—とは言っても実のところ微視的な見方に偏った見方—が発達した今日の“科学”技術を改めて見渡してみると、技術は全般に巨大化・集中化・一様化の度を増し、その度合いが増せば増すほどに、過去に起きたと同程度の天災であっても、それに伴って生じる人災の規模はむしろ大きくなる傾向がある。天災としての東日本大震災が引き金となって、ついに起きてしまった原発人災はまさにその一大典型と言えよう。

○

建築は、自然の脅威から私たち人の身体を守るための設えとして起こったと考えられる。建築を、天災となり得る雨・風や地の揺れに耐える構成とすることはもちろん重要であるが、それと同時に、内部空間における光や熱・空気・湿気の振る舞いを、そこに

棲まう人にとって不快とならぬよう設え備えることもまた重要である。しかし、後者はこれまでのところ、前者に比べて軽んじられてきた。

昔から“衣食足りて礼節を知る”と言われてきたが、この表現には「住」が抜けている。ここでは、建築空間の光や熱の振る舞いが軽んじられるわけだ。そう思うことが少なくない。昔の人にしてみれば、住は雨・風が凌げればよく、地の揺れで壊れたら再び建てればよい。そう考えて、住は衣食ほどには意識を向ける対象ではなかったのかもしれない。

しかし、その昔と今は違う。暗ければデンキ（電灯）、暑ければエアコン、寒くてもエアコン…これらが当たり前だと思っている人の数は、建築の素人ばかりか玄人にもたいへんに多い。これら電気・機械仕掛けの技術があるのは人々の意識がそれなりに住に向いてきたからだろうと思う反面、これらの技術は人々の住に対する意識を甚だ浅いレベルに留めさせてしまっている。巨大“科学”技術の端末としてのデンキ・エアコンなどの氾濫は、不自然でない在るべき「住」が設えられてこそその本来の明るさや温かさ・涼しさを人々に気づかせないようにする役割を果たしてしまっている。そう思えるのである。

建築外皮の光や熱・空気・湿気に対する諸性質を、住まい手の明るさ・温かさ・涼しさの創出に生かせるようにする。これを現代では「パッシブデザイン技術」と称する。実のところパッシブデザイン技術は建築（環境）技術の基本なのだが、これを重要だと考える人の数はいまだ少ない。それは先に述べた巨大“科学”技術が人々の意識を浅いレベ

ルに留めさせていることと大いに関係していると思う。

パッシブデザイン技術は、建築がその外なる自然と上手に折り合いをつける技術であり、人の内なる自然を健やかに働かせるための技術である。外なる自然と内なる自然をほどよく繋ぐ技術と言ってもよい。筆者はこれまでに携わってきた建築環境の研究・教育の体験を通して、そう考えるようになった。

○

“環境”なる言葉を当たり前のように口にしたり耳にしたりするようになって四半世紀が経ただろうか。環境という言葉は“公害”“汚染”“破壊”…といった負のイメージに関係して次第によく使われるようになってきたが、本来はそのような意味を内包しているわけではない。「環境」を偏りなく定義すると「主体となる何かを取り囲んで存在するモノとそこで起きているコト」となる。

これでは抽象的すぎて分かりにくいので、例題を挙げて考えてみる。主体を「人」としよう。人は必ずその身体を支えてくれる床・地面の上であって生活しているので、床や地面は環境の一部である。窓や壁・天井も同じだ。これら壁や床・天井に囲まれた空間、そこには空気が充満しているが、空気もまた環境の一部である。このような主体たる人にとって最も身近な環境を「建築環境」と呼ぶ。

地球の全体は身近ならぬ身遠だが、これを「地球環境」と呼ぶ。その主体は私たち人を含む生物である。「体内環境」という言葉があるが、この場合その主体は人の脳である。体内環境（身体）の調子が悪ければ、仕事が

手に付かない…それは脳の働きが鈍るからにはほかならないが、そのことを思えば、体内環境の主体が脳であることが納得できるだろう。

地球環境の外側に広がる空間は「大宇宙」と呼ばれることがあるが、素粒子や天体の物理学は、大宇宙の姿を以前に比べれば随分と明らかにしてくれている。そのような物理学の法則で建築環境にも深くかかわって重要なもの一つだけを挙げるとすれば、それは放射（電磁波）の法則だと思ふ。

放射に関する理論と測定技術はこの120年ほどの間に大いに発達したが、そのおかげで、大宇宙には、およそ140億年前の創成時に現われた放射の名残り—宇宙背景放射—が充満しており、それに相当する温度は -270°C （絶対温度で約3K）であることが分かっている。このような極寒の大宇宙にあって、地球表面全体の平均温度は、私たち人を含む生物が棲むことのできる約 15°C という値になっている。それは、太陽が四方八方に放出している放射（電磁波）のごく一部が地球に届いているからだだが、その太陽の表面温度は宇宙空間に充満している背景放射の温度 -270°C よりも遥かに高い 5700°C ほどである。このこともまた放射の理論から明らかとなる。

私たちの体温はおよそ 37°C である。これは、食物の摂取に始まって、体内環境（身体）から建築環境、そして地球環境・大宇宙へと連続として絶え間なく営まれている放熱によって実現されている。食物の多くは、乾かして燃やせば 1000°C を超える炎になる。私たちは 37°C の体内環境で、燃やせば 1000°C になり得る食物を恒温動物に共通の特殊な仕方で燃やしつつ、生じた熱の絶え間ない放出によって身体の構造と機能を巧みに維持しているのだ。人体を「小宇宙」と呼ぶわけである。

このように考えを巡らしてみると、建築環境は、大宇宙と小宇宙のあいだに挟まって存在する「中宇宙」と言えるように思えてくる。小宇宙たる人の体内環境は、中宇宙たる建築環境（さらには都市環境・地域環境）・地

球環境の内にあり、地球環境は大宇宙の内にある…そのようなイメージである。それを1枚の絵として描いたのが図1だ。筆者はこれを「環境の入れ子構造」と呼んでいる。

○

私たち人を含むすべての生き物にとって

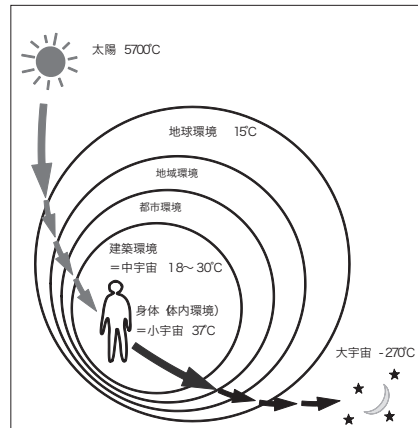
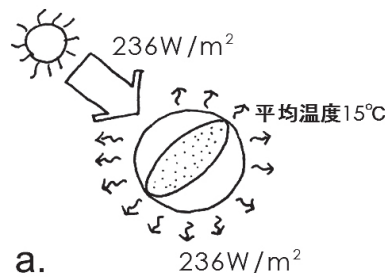
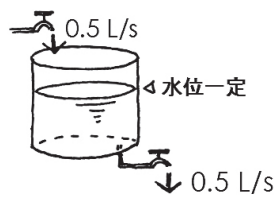


図1 環境の入れ子構造



a.



b.

図2 地球 (a.) も水の入ったタンク (b.) も「入れる」・「出す」の双方があつて恒常性一動的平衡を保つ。

究極の資源は何か？ この自明とも思える質問に対して、多くの人々は「太陽」と答える。これは誤りではないが、正答というわけにはいかない。それは図1に示したとおりで、地球環境が平均 15°C に維持されているのも、人体の深部温度が平均 37°C に保たれているのも、高温の資源を必要条件とすれば、その一方で、放熱が保障される低温の環境空間が十分条件として存在しなくてはならないからだ。資源が資源たるには、放熱先として

の環境空間が不可欠なのである。


くどいようだが、地球表面が吸収する光と、地球が宇宙空間に放出する熱を、図2のa.にそのエネルギー流量率の数値とともに示そう。北極から赤道・南極までの地表面のすべてについて平均すると、 1m^2 あたりに毎秒 236J ($=236\text{W}/\text{m}^2$)の光が吸収され、同量の熱が絶え間なく宇宙空間に放出されている。両者があって平均温度 15°C は実現されている。

図2のb.は、a.に示した光と熱の出入りを、タンクにおける水の出入りのアナロジーとして描いたものである。蛇口からタンクに入ってくる水が太陽からの光、タンクの底に繋がれたパイプとその先にある蛇口から出ていく水が地球から宇宙空間への熱、タンクの水位が地表面の平均温度に対応する。

入れて出す。地表面の平均温度もタンクの水位も恒常性一動的平衡—が保たれるには「入り」とともに「出」が重要なのである。恒常性は「流れ」のなかにつくられる。人を含む生き物の形態（カタチ）、それらの生き方（カタ）、人のつくる建築のカタチ（構造）とそのカタ（機能）—これらはみな「流れ」があって、その中に現われるのだと考えることができる。

建築環境における光や熱・空気の「流れ」もまた同じである。不自然でない本来の明るさ・温かさ・涼しさは、建築環境空間を貫く「流れ」がほどよいときに初めて現われるのだ。だからこそこのパッシブデザイン技術なのである。

しゆくや・まさのり | 自然のポテンシャルを生かした光環境や熱環境づくりについて、熱力学・人間生物学の視点に立った研究と教育に携わっている。専門は建築環境学。著書に「Exergy: theory and applications in the built environment」(2013年1月、Springer-Verlag London)、「エクセルギーと環境の理論」(改訂版2010年9月、井上書院)など。



●次回は10月号掲載です。

第20回 JIA 東海学生卒業設計コンクール 2013 入賞作品

※掲載図面は作品の一部の場合もあり。入賞者の所属は2012年度の応募当時。敬称略。

金賞 「名駅ウエスタン-駅裏は足場をまとう-」
戸谷^{だいき}奈貴 (名古屋工業大学)

銀賞 「周遊する舞台~
「学び」を取り入れた観光地としての新しい鳥取砂丘の提案~」
鈴木理咲子 (椋山女学園大学)

銀賞 「妖怪的建築の表出」
福田晃司 (名古屋工業大学)

佳作 「Architect Jungle—都市ビルに公園を建築する」
西里正敏 (豊田工業高等専門学校)

佳作 「記憶なき駅の半生-まちのゴミがまちを紡ぐ-」
大岩良平 (名古屋工業大学)

佳作 「LONG PIECES STREET」
千葉基博 (名古屋工業大学)



模型を前に審査員が議論



入賞者と古谷誠章氏(中央)

審査員



古谷 誠章
委員長・早稲田大学教授
ナスカ一級建築士事務所



鈴木 幸治
ナウハウス



廣瀬 高保
中建築設計事務所



山田 高志
山田高志建築設計事務所



川口垂稀子
Liv 設計工房



植野 収
石本建築事務所

総評

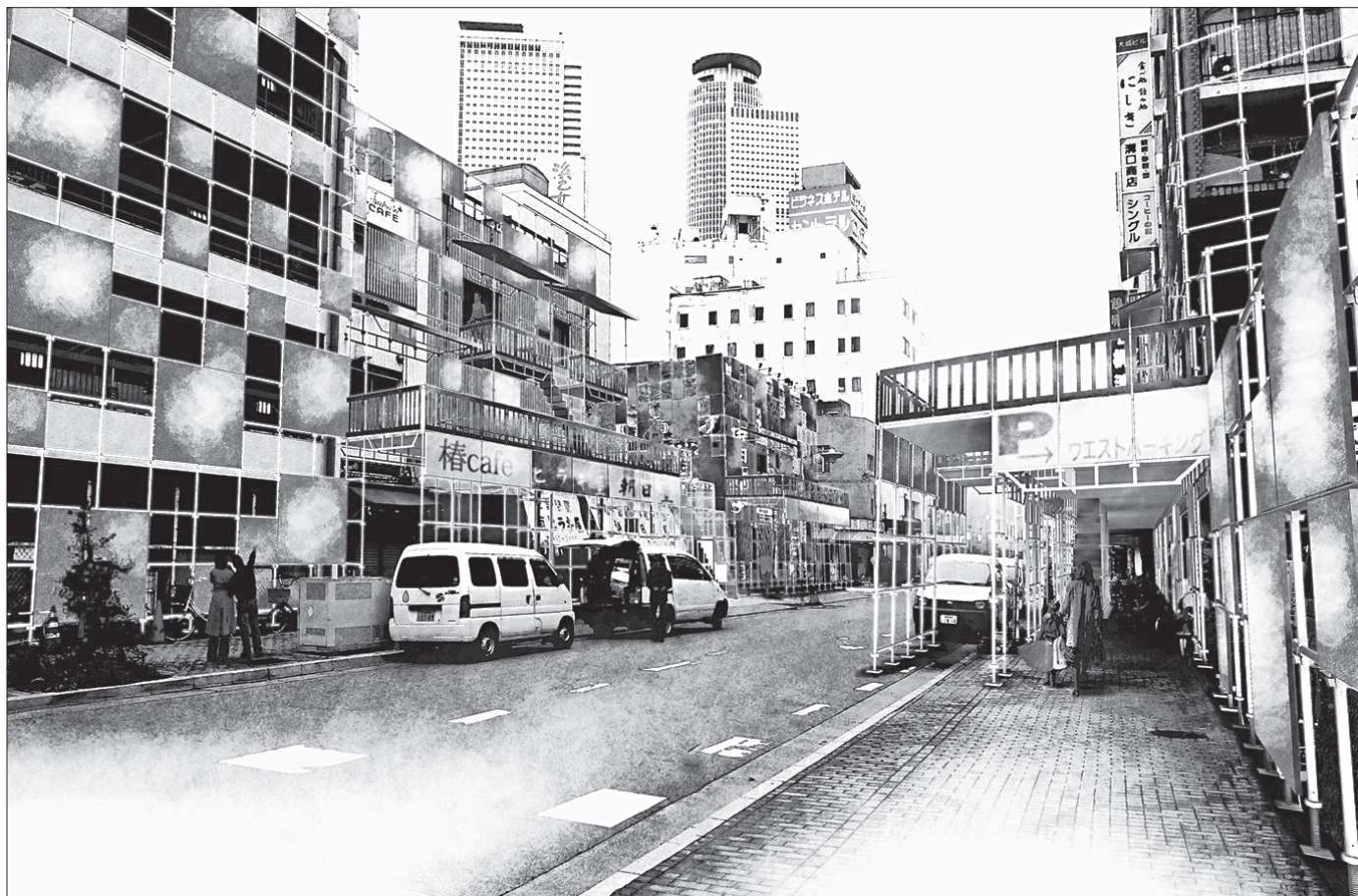
審査員長 古谷 誠章

書類による1次審査を経て2次審査に臨んだ6点の作品は、男子5名に女子1名、昨年度とはだいぶ様変わりした陣容だった。昨年は概して「草食男子」対「肉食女子」の対決と評したように、元気があり芯の強さを感じる女子陣を、優しくどちらかという内省的な男子が制するという顛末だった。しかし、今年は男子陣が意地を見せた、みたいな感じといたらいいだろうか。事実、質疑などのやりとりの中で、昨年の金賞作品に対し、普段の自分とは違って意識的に力強さを前面に出したとのコメントもあった。だが、時代が今日の若者たちに、改革に挑戦する積極性よりもむしろ現状を是認する消極的な安寧を求めさせている状況は、すでに久しく続いており、今後の建築をどのように考えたらいいか、改めてその社会的使命や課題を議論すべき時が来ていると実感する。

それでも今年の6作品が志向する、現状とのつながりを求めながらも、そこに建築的「メス」を入れ、「更新」や「操作」を施すことによって、何か新しい価値をもたらそうとする考え方には賛成できる。最優秀になった、駅裏の現状に愛着を持ちつつ、駅表にはない別のアイデンティティをもたらす、名工大：戸谷奈貴君の「名駅ウエスタン」をはじめ、ほかにも同じく名工大：福田晃司君の「妖怪的建築の表出」が何の変哲もない街角に、それも1棟のビル

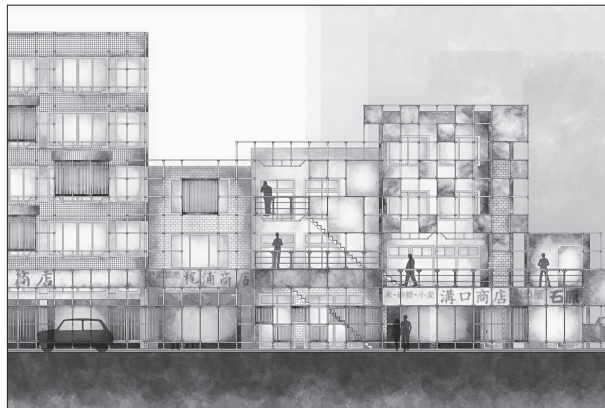
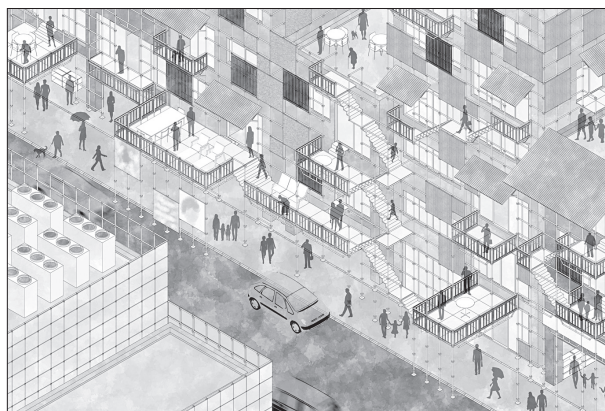
だけではできない、新たな価値を身にまとう変身を最小限の「手術」で企てたり、既存の隣り合うビルを貫くように斜めのポイドを挿入して、光や風を取り入れようとする豊田高専：西里正敏君の「Architect Jungle」など、いずれも既存を利用しつつも、明らかに価値の転換を図ろうとしている点に共感する。個人的には「妖怪的建築の表出」の持つ、詩的な空間性とその表現に惹かれたが、結果としてはやや伝わりにくかったかもしれない。

そのほか、自分自身がこよなく愛する鳥取砂丘に対し、椋山女学園大の今年の紅一点鈴木理咲子君が自らの出身地でもないのに、そこに「よその」こそが果たせる役割を見だし、積極的に砂丘を守ろうとする姿勢にも心が動いた。砂丘という「生き物」に対する母性的な愛情を感じる。名鉄の幻の高架駅をテーマにした名工大：大岩良平君や、同じく千葉基博君の岡山の商店街を再生する計画も、どこかで風前のともしびのような現況に対し、その衰退や風化を食い止めようとするものだが、そこにも同様の「母性的」なものが働いているようにも見える。ただ、作者が男性であるためか、その愛情がやや屈折して、問題の本質からやや遠ざかった建築の造形に向かった感があるのが惜まれる。



開発が進み高揚感のある名古屋駅の表側とは対照的に、隠微で雑然としたままの「駅西」エリアに着目して、既存のビル群を一切取り払わずに、建設用の足場を掛け渡して増床していこうとする計画。既存の外壁に付着した足場空間は、もとの建築の看板群などを透かして見せながら、この街全体をひとまとまりの「場所」として感じさせるものだ。この案全体に漂う一種の「うら寂れた」風情が、いわばそれを演出したテーマパークのようにも見える。

実際には、猥雑で自然発生的な都市を、ひとりの作者が「計画」することは難しい。なぜならそれは時とともに複数の主体によって、次第に醸成されるものだからである。しかし、この案が持つ可能性は、「建設足場」という仮設物として都市の見慣れた風景になっている脇役を、種々雑多なこの街全体を取り結ぶ、いわば揃いの衣装として身に纏わせることで、知らないうちにあちこちのビルが歯抜けになっても、あるいは脈絡なくバラバラに建て変わっても、この街そのものはその「風情」を保つことができる点にある。まさしく「足場」なのだから、日頃のビルのメンテナンスだけでなく、これを使って今後の改修や、場合によっては改築がなされればよいし、さらにいえば、これ自体が構造を補強するアイデアもあり得るわけで、年月が経つうちにどこまでがオリジナルで、どこからが新しいのかさえ判然としないような、あたかも「サイボーグ」のような街の可能性もあるのではないだろうか。(古谷誠章)



銀賞 周遊する舞台～「学び」を取り入れた観光地としての新しい鳥取砂丘の提案～ 鈴木理咲子(椋山女学園大学)

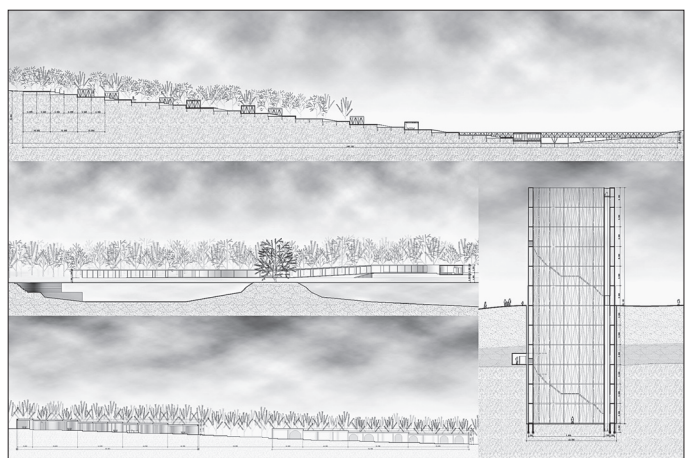
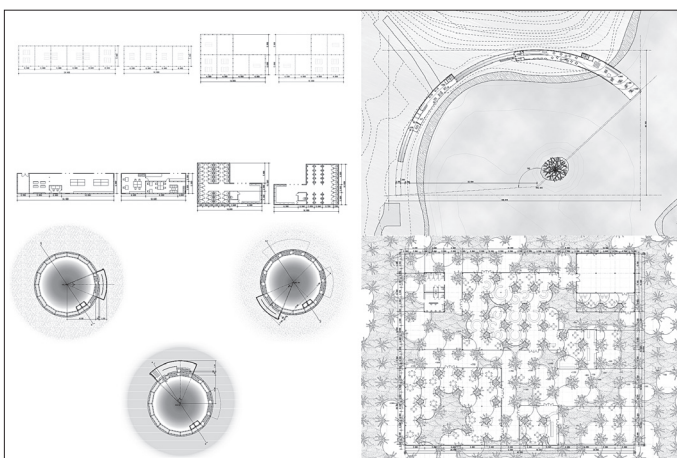
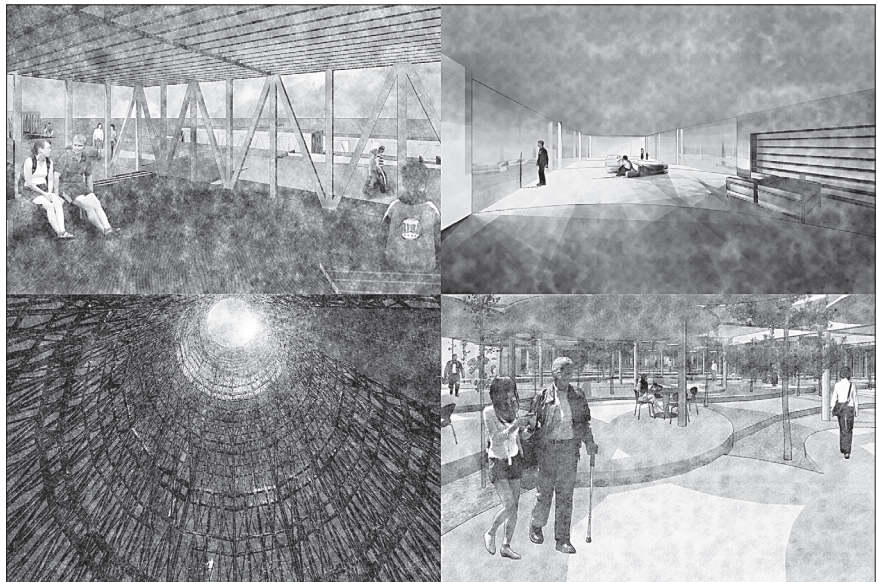
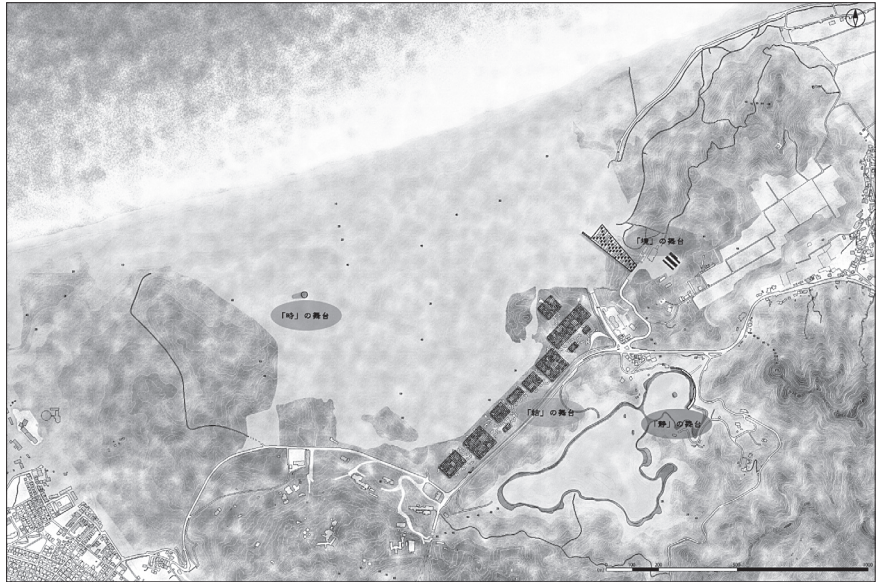
こよなく鳥取砂丘を愛でる思いに満ちた作品。寂れつつある観光施設や、手入れのされない増殖する樹木に危機感を感じ、砂丘のあるべき姿を見つめ直して新しい息吹を与える提案。

4つの舞台を砂丘の境界線に寄り添うように、自然を壊さないように点在させている。訪れる人が砂丘に触れ、水辺に映る風景に佇み、樹木の保全を導く、それらの舞台は砂丘が時間と共に変化することを許容し、砂と一体化することを受け入れている。

その中でも砂漠に立つパベルの塔を彷彿させる「時の舞台」に強く惹かれる。塔は地中深く掘り下げられ、古代から現代までの地層を見ることができる。太古の地層に身を置き砂丘の歴史を魅せる仕掛けによって億年単位の歴史を知り、これからの砂丘の未来を見守る。

ここまで砂丘に密着しロマンを感じる提案をしているが、受賞者は意外にも鳥取出身でなく、卒業設計にかかわるまで接することもなかったようだ。だが外部の人だからこそその視点で、冷静で客観的に場所の良さや問題点を分析し、地域おこしに風穴を空け活躍する存在でありうることを察知する提案である。

(川口亜稀子)

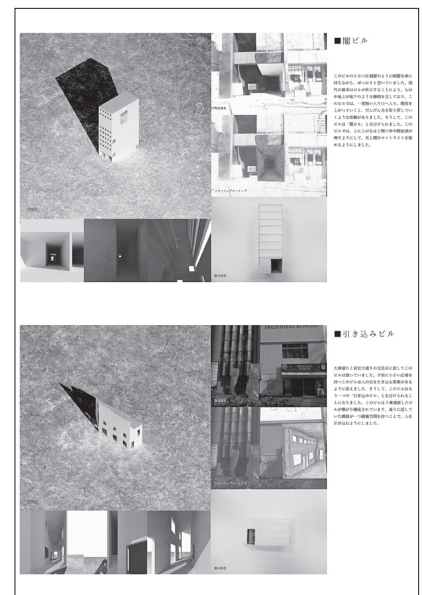
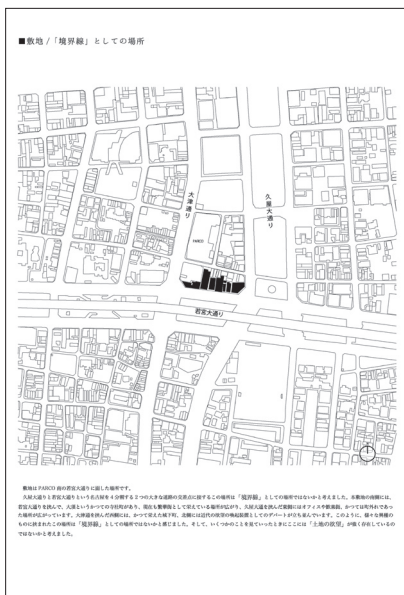
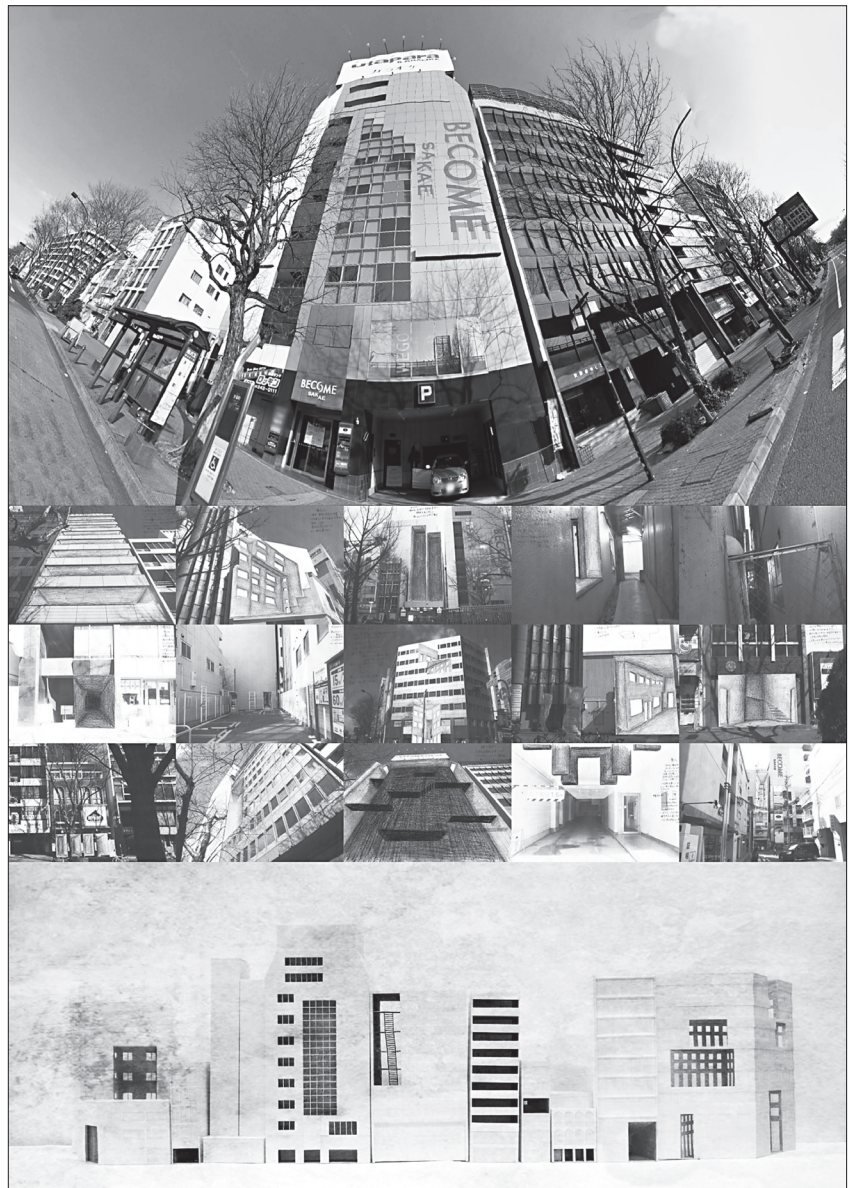


標本箱に整然と並ぶ昆虫。虫ピンで留めた一つ一つのそれには、標本ラベルに、標本作製の際の生態情報が記録されている。都市とは、「予期せぬもの」に出会う場所だと考え、都市のリアリティ「名古屋」について独自の感性で考えてみたという作品である。

敷地はPARCO南の若宮大通りに面した場所に立つ11棟のビルを「予期せぬもの」として、自身の身体を刻むかのように、痛々しく暴いていく。

建築をサーヴェイし、タイポロジカルに比較検討し描き分ける。次に自身の空間タイポロジーを想定し、建築のプランを変奏しながら、そのプログラムを構築していくとする。イメージの断片を、都市に潜在化している「欲望」として位置づけ、物語る。その手法は、ナフタリン臭い匂いが漂うようなカラージェドローイング、標本模型。11棟の建築は昆虫の標本をつくる時のように、丁寧に展足されていく。その瞬間に、奇型化されたキャラクター=妖怪として浮遊しはじめ、暗く長い11棟の影が伸びていく。

楽観できない未来への思いを、息苦しさに堪え「種子」を胸に埋め込む。「妖怪的建築」という、まったく噛み砕かれていない語彙。まとめて固めるのではなく、浮遊させ繋げてゆこうとする感性。混沌とした時代、建築の触れ方に一石を投げ、影を感じる心の中を生きてゆく。希望に繋がる、とても興味深い作品でした。(山田高志)



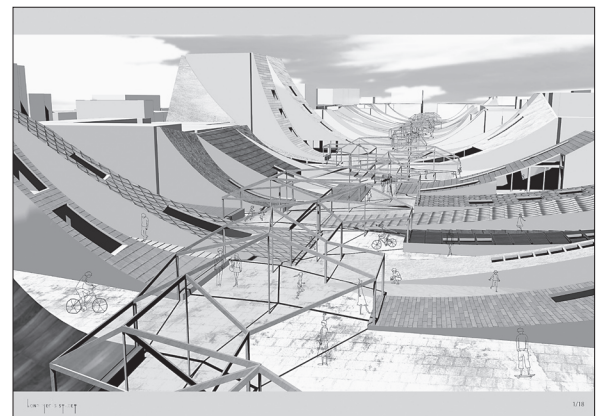
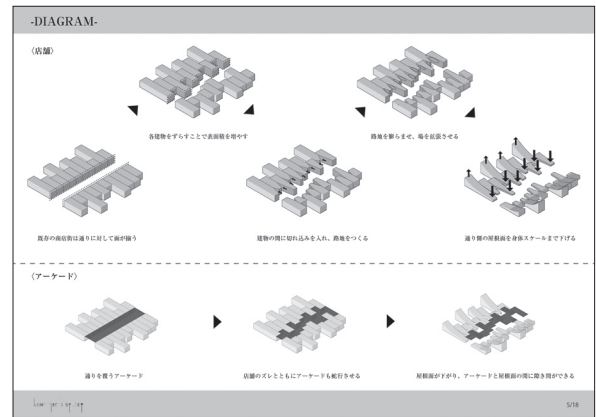
佳作 「LONG PIECES STREET」

千葉基博 (名古屋工業大学)

店舗の利便性の追求と消費者の限りない欲望が、大型商業施設を巨大化し人を集める。その反面、多くの馴染みの商店街が衰退していく。この作品はアーケードのある商店街で、その地域的特性を残しつつ活性化できないかと提案している。

大型店舗を大きな水槽にたとえるなら、商店街での人の動きは川の流れのようなものである。ある場所では淀み、溜まった水が流れ出し次の淀みに向かう。具体的な計画手法は通路に面する店舗の先端を隣同士凹凸にして、なおかつ隣の店舗との間には路地をつくり、人が通り過ぎてしまわないような工夫がされている。さらにアーケードを通路の高さまで下ろし、アーケード街の持つ暗い閉じられた空間を開放する仕掛けもある。

もしこの計画が実現すれば、商店街再生の話題作となることは間違いないであろう。しかしながら人が好んで集まる場所を計画的につくり出すことは難しい。何か特産品とか歴史とか、商店街の中身が重要である。古くからある商店街でも、魅力がある場所には人が集まる。この作品は商店街でありながら、扱っている商品の匂いが漂ってこない。またよくつくりこまれた施設の形状が、かえって商店街の将来の広がりイメージする妨げになっているのではないだろうか。(廣瀬高保)



審査によせて

「JIA 東海学生卒業設計コンクール 2013」特別委員会委員長 吉川法人



2012年末、東海地方の大学・短大・工専・専門学校など36校の建築関係学科へ作品募集の要項を送付し、2013年4月1日の締め切り日までに10校29作品の応募がありました。

●第1次審査：4月20日(日)、東海工業専門学校金山校にて。まず、各審査員が、全作品を1時間かけて各自審査し、その後全員で全作品を1作品ずつ取り囲んで審査・意見交換をして、各自6点を持って投票しました。2点以上を得票した9作品を審査員全員で精査し、最終的に6作品を選出・決定しました。

●応募作品展示会：5月28日(火)～6月9日(日)まで、名古屋都市センター11Fまちづくり広場にて29作品を展示。入賞作品は、模型と共に展示されました。

●公開審査会：6月1日(土)名古屋都市センター11F大研修室にて、東海支部長挨拶、審査経過報告(委員長)の後、公開プレゼン(各プレゼン7分・質疑13分/人)、休憩後に公開審査会が開催されました。6作品の模型を並べ、各審査員がその前で作品に対する意見・質問などを述べた後、それぞれ金賞と思う作品一つ、銀賞と思う作品二つに投票しました。票が分かれて一時はどうなることかと心配しましたが、金賞を2点、銀賞を1点と置き換えて各作品の点数を合計しました。その結果、戸谷さんと鈴木さんが同点になり、審査員に

よる決戦投票の結果、戸谷さんが金賞に。銀賞候補の福田さんと西里さんも同点になり、これも決戦投票の結果、福田さんが選出されました。これで金賞1点、銀賞2点、佳作が選出されました。全国コンクールへは、今回の6作品が推薦されました。

●20周年記念座談会「卒業設計を問う」(コーディネーター/古谷誠章氏)：今年の審査員に過去の入賞者3名(2005年名古屋大学卒業：皆川貴弘さん、2008年名古屋市立大学卒業：酒井千草さん、2009年名古屋工業大学卒業：金澤潤さん)が加わり、卒業制作に対するアドバイスなどを述べていただきました。詳細は9月号で。

●表彰式：鳥居支部長より表彰状が、古谷審査員長より副賞が各人に手渡されました。閉会后、近くの居酒屋で、入賞者、審査員、コンクール委員など30名近くで親睦会を開催。作品への議論、意見交換など学生にとって大変に有意義で貴重な場となりました。

●終わりに：当コンクールは、この地域の学生の成長を願って開催され、早20回を迎えました。今後も東海支部の主要な活動の一つとして、地元大学などとの連携をとりながら取り組んでいく所存です。20回という節目を迎え、初心に返り、気持ちを新たに運営にあたり、来年も一人でも多くの学生に応募していただくことを期待しております。

第1回 JIA 東海住宅建築賞 第1次公開審査結果

まず、非常にレベルの高い作品が多かったというのが率直な感想です。選定を委ねられた審査委員の責任は重大であり、緊張しながら審査に臨みました。水準を超えた作品が集まると、審査員が変われば全く違う選定結果になるであろうと感じながら7つの作品を現地審査対象として選出しました。以下、7作品について簡単に講評させていただきます。

伊藤恭行 | 審査委員・JIA東海支部会員 名古屋市立大学教授・CAn (C+A名古屋)



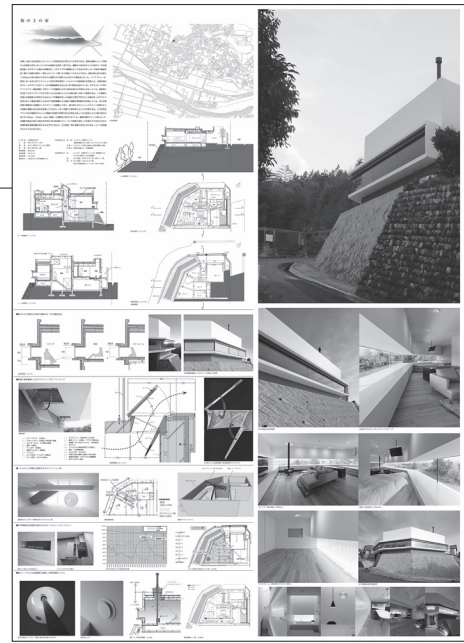
坂の上の家 (鈴木貴紀)

水平方向の開口を、最大限に広く確保することに設計のテーマを定めた住宅。視界を阻害する要因となる構造部材やサッシ方立などは徹底的に排除される構造形式とディテールとなっている。設計者が非常に高いプロフェッショナルとしての技量を持っていることを感じさせる。さらに、オリジナリティあふれる自然換気の機構やストーブの熱を住居全体に循環する仕組みなど、基本的な性能にも配慮が行き届いており、きわめて完成度が高い建築である。



OSHIKAMO (佐々木勝敏)

平面の形式が特徴的な住宅である。4本の腕を伸ばしたような平面形が、基本的にワンルームの空間に複数の領域を生み出している。連続していながら固有の異なる領域を与える平面の形式は、他の建築家たちもその方法を模索している現代的な建築のテーマの一つだが、この作品では断面方向で高さの変化を与えることで、さらにその可能性を拡張していこうとしているように思われる。外観にはほとんど開口がない閉じた建築だが、高さを低く抑えることで周辺の住宅街のスケールの中に着地している。



光の郭 (川本敦史・川本まゆみ)

正方形平面を持つワンルームの空間の中に4つの小さなBoxが置かれるというシンプルな住宅。Box in Box の形式がストレートに実現されている。外周部の壁面沿いは4面ともすべてトップライトが設けられており、偏りのないニュートラルな光で空間全体が満たされているので抽象度の高い空間となっている。それによってBox in Boxの明快な構成がさらに強調されることに繋がっている。





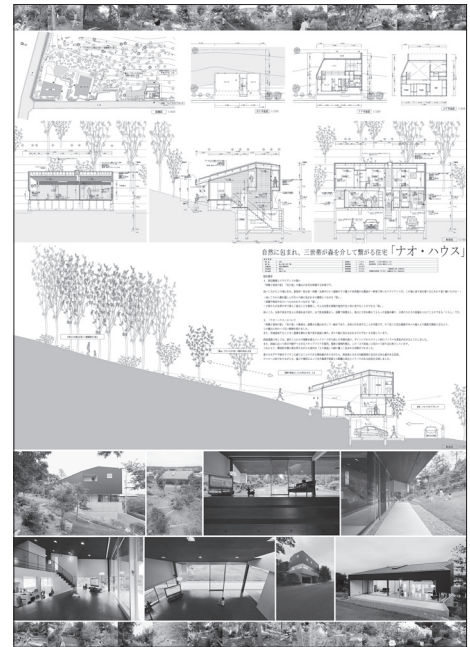
ナオハウス (渡辺隆)

南西面が斜面緑地に面した非常に恵まれた敷地条件の中に建つ住宅である。この建築は、この敷地の魅力を最大限に引き出すことに力が注がれている。特に西から南にかけて廻り込むように設えられた大きなガラス引き戸とそれに続く水平連窓によって、周辺の状況に応じた室内外の連続性が獲得されている。穏やかな佇まいではあるが、同時にしなやかな強靭さを感じさせる作品となっている。

MOGURA (宇佐見寛)

強い個性を持った外観が印象的な住宅である。公開審査会では、この外観の

現れ方が周辺に対して強すぎるのではないかという議論がなされた一方、さまざまな方向から光が入る大きな内部空間が魅力的であるとして現地審査の対象として選出されることになった。特にアプローチ部分の半外部は、不思議なプロポーションを持つ空間であるとともに自然換気を誘発する装置としても機能しており、環境に対する意識の高さも感じさせる。

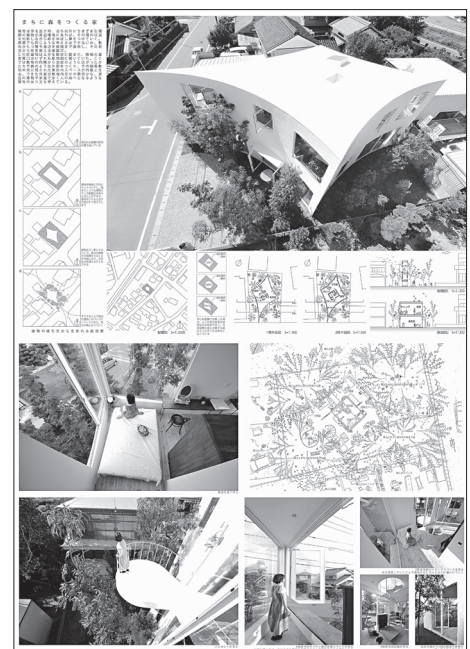


まちに森を作る家 (栗原健太郎+岩月美穂)

敷地と建築の平面形状の関係が秀逸である。歪んだひし形の平面を長方形の敷地に角度を振って配置することで4つの外部空間を生み出している。この配置によって、一般的な日本の住宅街において見られる隣地との間にできるデッドスペースを消してしまうことができる。内部は中心にコアを置く形式のシンプルなワンルーム構成だが、隅部がすべて鋭角となっていることで内部にしながら外部にいるような知覚を与える空間をつくり出している。

母の家 (貞村道俊+吉元学)

この住宅は本質的な意味での開放性のあり方を問いかける建築になっているように思われる。それは、透明性=開放性ではないという主張である。やわらかな草に覆われた大きな屋根の下の空間は、前面がすべて土間になっており、そこに設けられた複数のレイヤーからなる建具の開閉によって外部との距離を調整することができる。この建築的な仕掛けが、住まい手が開放性をコントロールしながら地域コミュニティとの関係の深さを選びとっていくことを可能としている。



2013年度 JIA 本部通常総会レポート

2013年4月1日に公益社団法人に認定されて初めての記念すべき本部通常総会が、6月28日（金）、建築家会館1階大ホールにて執り行われた。



芦原太郎会長の第一声は、ここに至るまで同じ方向に向かって議論し、ご苦労された関係者の皆さんへの感謝の言葉であった。そして、新しい定款にある公益寄与と公益保護を目的としてどのように具体的に展開していくかとし、支部・地域会を中心に地域に根ざした公益寄与活動を具体的に展開していきたいし、JIAの会員であれば専門家として安心して任せられるという会員の質と行動を社会に対して示すことが公益保護に繋がることの意義を強調された。歴史を遡ると、1956年に建築家協会ができ1987年に新日本建築家協会になり、今年2013年に公益社団法人になった、組織を新しくしながら社会にあった建築家の活動ができるように形を変えてきていると思う、と述べられた。そして、公益社団法人になったのだから、公益とは何かを考えながら、新しいJIAを皆さんと力を携えて「世のため人のため」に専門家として何ができるのかを考えながら進んでいきたいと、挨拶を結ばれた。

議事および報告事項2012年度事業報告から始まり、第1号議案から第5号議案は粛々と進められ、すべて承認された。2013年度事業計画では重点施策として、1)支

部・地域会を主体とした地域に根ざした社会貢献活動の展開、2)会員増強と建築家資格制度の推進、3)建築界の国際化に向けたJIA国際活動の展開、4)発注・設計契約の健全化に向けた業務環境改善活動を推進、5)社会に対する適切な広報活動と会員相互のコミュニケーション促進、の5つについて説明。計画する主な事業として、1)建築環境整備事業では環境保全活動・まちづくり活動・災害対策活動・建築相談活動、2)建築文化育成・交流事業では表彰活動・交流活動・国際協力活動・教育育成活動、3)建築制度整備事業では継続職能研修(CPD)制度運営・建築家資格制度運営・建築関連の法・制度の調査研究・提言の説明があった。2013年度予算は新新会計で報告された。

いくつか質問があった。その中でも、ひとつは現在終身会員の身分のこと、もうひとつは準会員の資格のことが印象的であった。終身会員の身分はそのままスライドされ従来通りとのことであり、準会員の入会資格などは、一級建築士の資格の有無や法律の問題もあるので、これから検討するとのことであった。



総会終了後30分の休憩をとって「建築家資格制度の今後について」と題し、1時間という時間制限の中で意見交換会が行われた。芦原会長の説明から始まったが、今の登録建築家制度を具体的にどうすれ

ばいいのか、JIAと士会連合会との合意に向けての行動などに対する意見は、今はそれぞれで違いはあるが、目指すものは同じであるはずなので中長期的な展望を持って議論してほしいとのことであった。そして、配付された資料をもとに、JIAおよび登録建築家の将来像についての説明が芦原会長からあった。

現在のJIA正会員すべてを登録建築家にするというのはどのようにして実現するかとの具体策についての質問に対し、新しく正会員として入会する人は登録建築家の資格も取得する一本化の仕組みを目指すとの回答があったが、現在正会員で登録建築家でない人についての移行策についての回答はなかった。若い人がJIAを見たとき、正会員および登録建築家が分りにくいとの声があり、メリットについても疑問を感じているようなので、若い人、特に学生に対して説明できるものが、普及活動を積極的に行う上で必要なので本部で作ってもらいたいとの意見があった。当然ながら、登録建築家が目指すものは何かについての意見および説明が大半を占めた意見交換会であった。



総会の中でも、意見交換会の中でも、今後のJIAの目玉となるであろう準会員制度に期待を寄せている機運は感じたが、まだまだ準備不足であることが強く印象として残った。また、何よりも一般社会に認められるJIAにするにはどうしたら良いかを考えながら行動する必要性、そして公益社団法人JIAの重みを改めて感じた総会であった。



あいさつする芦原会長



総会の様子

尾林孝雄 |
尾林建築構造設計事務所



登録有形文化財

旧湊屋店舗兼主屋・土蔵



湊屋店舗



土蔵 西倉・東倉



湊屋店舗および門



渡船場史跡

■紹介者コメント

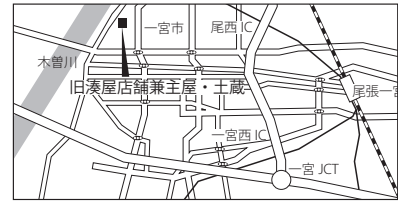
東海道宮(熱田)宿と中山道垂井宿を結ぶ脇街道「美濃路」は、「七里の渡し」と鈴鹿峠を迂回する街道として重宝された。美濃路7宿のうちの一つ起宿は、木曾川の起渡船場のある宿場町で水陸交通の拠点として賑わった。上流から定渡船場、宮河戸、船橋河戸の3つの渡船場があり、この湊屋店舗は最も多く利用されていた定渡船場に向かう往還の北端に建っていた。西に進むとすぐに渡船場があり、今は史跡として石碑が建っている。湊屋は起宿船庄屋のもとで船方肝煎(きもいり)を務め、渡し船を扱うほか、年貢米輸送や遠隔地と取引を行うなどの有力商人でもあった。

店舗兼主屋は、敷地の南西角に街路に面して

建ち、建物の東寄りに通り庭を配する。主屋より東に伸びる板塀の中央に庭へ入る門を構え、広い敷地間口を有する。土蔵は敷地の北西に建ち、2階建ての西倉と東倉の間を平屋の中倉が繋ぎ、これらが中庭をはさんで母屋と対峙している。

所有者の転居を機に建物調査がなされ、平成22(2010)年に登録文化財に登録された。同時に建物の利活用も模索され、現在は市民団体「湊屋倶楽部」が管理活用にあたり、「茶店湊屋」(水・土・日営業)、湊屋朝市(毎水8時～)、その他各種催し物が展開されている。近くには墨会館(丹下健三氏設計)が修復整備されつつあり、一宮市内・美濃路界隈の今後が楽しみである。

(参考: 美濃路探訪/一宮市尾西歴史民俗資料館、美濃路・起宿「湊屋」公式サイト)



所在地: 愛知県一宮市起字堤町33-1
 旧湊屋店舗兼主屋(登録番号23-0327):
 木造2階建て、切妻造り、平入り、棧瓦葺き、桁行13.1m、梁間12.4m 江戸前期、1959(昭和34)年改修
 旧湊屋土蔵(登録番号23-0328):
 土蔵造り2階建て、切妻造り、棧瓦葺き
 西倉/桁行7.5m、梁間3.8m
 東倉/桁行7.5m、梁間4m 江戸末期、昭和前期・中期移築増築



谷 進 | タクト建築工房

登録有形文化財

小野田家住宅



外側から見た長屋門



主屋南面



玄関土間より西側座敷を見る(写真撮影:小野田益巳)



■紹介者コメント

小野田家住宅は豊橋市南部、国道42号線の南側で、遠州灘に面した段丘上、渥美半島の根元ともいえるところにある。小野田家は江戸末期に庄屋を務めていた旧家で、12代当主の吉次郎(1822-80)は酒造や薬品販売にも手を広げ、繁栄の基盤を築いた。仕事で江戸に向くことも多く、そこで武家屋敷の門構えが気に入り、自宅に長屋門をつくったと言われる。明治時代に入り吉次郎は国学を学び、神道に傾倒して、村全体を神道に改めさせた。明治9(1876)年には長屋門で郵便取扱所を始めるとともに製糸業を中心とする殖産興業を村に広めた。

敷地は約2,400坪と広大で、樹木に覆われている。主屋(13代当主澄吉郎が建築)の外観は厚重なもので、南から長屋門を入った敷地の中央に

建っている。1階は正面右手の大戸から中に入ると表土間と台所土間があり、その左手に南北2列に6部屋が並ぶ。建物正面中央部には式台が設けられており、ここから神棚のある座敷に直接入ることができる。南と北の縁側を除く1階部分がそのまま2階になっており、表土間の上は納屋で、その他に座敷が4部屋ある。後年西に座敷2室が増築され、東と北にも増改築が施されている。1階と2階にこれほど多くの座敷を持った住宅は周辺になく、この家の繁栄を物語っている。

長屋門は武家屋敷の門構えをまねて建てられたといわれ、江戸末期の庄屋としては格段に立派なものである。門の中央は両開き戸で、右側にはくぐり戸がつく。門の正面右に1室、左に2室があり、納屋として使われた。

現16代当主は建物を残したいとの思いで長年

努力してきた。今もご夫妻の住居として使われているが、高齢となり、今後の維持管理についての悩みをお持ちのようである。登録を契機に行政の適切な対応を期待したい。

所在地: 豊橋市高塚町字郷中65
 主屋/木造2階建て、寄棟造り、棧瓦葺き、建築面積 | 292.30㎡、延床面積 | 436.04㎡、建築年 | 明治19(1886)年、棟梁 | 伊藤典太郎
 長屋門/木造平屋建て、入母屋造り、棧瓦葺き、建築面積 | 77.68㎡、延床面積 | 77.68㎡、建築年 | 嘉永2(1849)年頃、棟梁 | 不明
 登録: 2012年国の文化審議会が登録を答申、今年度登録の見込み)
 参考資料: 豊橋市教育部美術博物館 記者発表資料



山上 薫 | 山上建築設計

理事会を少なく、理事懇談会を議論の場に

本部理事・東海支部長 鳥居 久保



第212回理事会は、2013年6月6日（木）13時30分～18時30分まで、建築家会館1階大ホールにて行われた。出席者は会長以下、理事22名（3名欠席）、監事2名、事務局2名、オブザーバー6名（就任予定理事、監事）。新法人移行後、議事録署名の交代制はなくなり、常に会長と2名の幹事の記名、押印となる旨説明があった。

【審議事項】

1. 入退会者承認：9名入会、21名の退会希望があり、承認された。会員数4,345名（6月6日現在）（休会の希望者5名）

2. 2013年通常総会議案承認（議案書の説明）（筒井専務理事）

①2012年度事業報告と決算承認

2012年度事業報告／1.公益社団法人への移行申請と認定
2.各種の活動 3.JIAの発信力強化 4.運営体制の見直しの4点について事業を行った。

2012年度決算／新会計で表示。2013年度の総会より本部、10支部、58地域会を総括した全体会計を表示することになった。本部、支部、地域会すべての正味財産は437,000千円（貸借対照表）。積立金として災害対策積立資金、退職給与積立、基金積立金（国際交流基金）の3本にまとめた（旧来の決算のフォームは、本部一般会計の収支決算だけを提示してきた）。新新会計のフォームで今年度を決算した場合、公益事業比率は63.7%になった。

②2013年度事業計画と予算（報告事項）

事業計画は、議案書参照。新法人移行後のため2013年度予算は新新会計で行い、それを内閣府に提出する。参考資料として従来の形式を添付する。

（1）経常収益の合計では、本部予算は全体の43%を占めている。新法人移行後は、本部、10支部、58地域会で、公益会計、法人会計、それぞれに仕分けをして、その全体を一本化した。その処理にはかなり苦慮しており、今後システムの中で改善する。

会費における公益と法人の按分比率は50対50とした。本部から支部へ配分される運営費4割は会計上、直接支部に入る方式を取っている。支部から地域会にいく運営費も同様。支部、地域会の予算書の数字をそのまま入れている。

（2）「経常費用」において、新新会計では科目が規定されており、従来のように事業別、用途別、目的別の科目ではないため、その内訳が分かりにくい。そのため議案書では、すべての事業別にその内訳を作成した。

また、「経常費用」は事業費と管理費からなり、ほぼ同じような科目から構成されている。その中で人件費や家賃の按分比は、公益対法人比を、48対52とした。そうすると全体で経常ベース（経常増減額）ではマイナス。今後公益目的事業比率を確保しつつ、収益事業によってこのマイナスを減らしていくような、経営的視点も要求される。

参考として、本部における従来の新会計での予算書を添付。新新会計では「正味財産」ベースでの予算書になっているのに対して、こちらは収支ベースで作られているために、従来の読み方と違う

で注意が必要。

③理事および監事の選任の件…承認。

④準会員・協力会員の入会金および会費の件…承認。

⑤地域会設置の件…承認。正式に九州支部の8地域会が承認された。

⑥名誉会員選任…承認。東海支部の森口氏が名誉会員に承認された。

また、学生会員の資格要件として、学生の身分を必ずしも建築学科の学生に限らないことが確認された。

3. 委員会体制再編の件（松本副会長）

芦原会長によって委員長候補が発表され、社会貢献グループでは職能・資格制度委員長として大澤秀雄、公益事業委員長として赤羽吉人、業務改善委員長として森暢郎、組織管理グループでは財務・事業管理委員長として小田義彦、総務委員長として鈴木利美、広報委員長として上浪寛、教育・表彰委員長として堀越秀嗣、フェロシップ委員長として道家駿太郎、国際交流委員長として岩村和夫の各氏が指名され、一旦承認されたが、今後、変更される可能性ありとされた。

4. 支部規程・地域会規程の一部改定…承認（小田副会長）

・ 支部規程の修正。

第8条第1項（3） 支部の事業及び会計の理事会への報告は、支部長が理事会に報告する。

・ 地域会規程の修正

第7条第3項 地域会の役員の構成、総数、選解任等は支部役員会での承認のみでOK。

第8条第1項（3） 地域会の事業及び会計の支部役員会への報告は、地域会長が支部役員会に報告する。

第10条第1項 地域会役員会の構成は支部で定めるのみで理事会承認は必要ない。

【協議事項】

1. 会員規程等に関する諸問題について（上浪会員・会費WG主査）

今年度以降名誉会員になり、かつ正会員である者は会費を納めることや、フェロー会員の資格要件はフェロシップ委員会で今後決めていくこと、さらに、準会員の権利や資格要件は今後支部ごとに決めていくなどを協議した。

【報告事項】

1. 「JIA 建築家大会2013北海道」について（上遠野北海道支部長）
すでに宿泊が確保できにくい事態が予想されるため早めの予約などをお願いします。

2. 後援名義承認の件について（筒井専務理事）

3. 2013年度理事会開催スケジュール再確認（事務局）

理事会を少なくして、その分、懇談会での議論の場を増やすことが目的のスケジュール。入退会承認など、速やかな手続きが必要な審議事項に関しては、理事全員が決を取れる書面表決（メールなど）で処理するなどの運用で処理していく。

東海支部役員会報告

2013年度第1回目の役員会。本部報告では月末に控えた総会の議案などの詳しい説明があった。相前後して議案書も届いており、書面表決するか、委任をするか迷っていたところである。そこでふと思ったのだが、理事・監事の選任において、一括で賛否を問うているのである。従来、支部や地域会でも同様であり疑問にも感じていなかったが、本当に一括で良いのだろうか。中にはこの人はどうかということはないのだろうか。以前、定款改定特別委員会で法人法などを勉強していたとき、理事は一人ずつ選任するというのを何かで読んだ気もする。一人ずつ選任するのが本来の姿のような気もするが、企業の株主総会でも取締役の選任が一括であったりする。さて、どれが正解だろう。

鈴木慶智 | 愛知地域会



日時：2013年6月14日（金）16:00～18:00

場所：昭和ビル5階 JIA 支部会議室

出席者：支部長、本部理事、幹事10名、監査1名、オブザーバー5名

1. 支部長挨拶

2. 報告事項

(1) 本部報告

①第212回理事会（6/6）（鳥居） ※理事会レポート参照

②総務委員会（5/16・6/13）（服部）

【審議事項】

入退会審査：関東甲信越支部より経済的理由による休会希望あり、復帰の念書をとって承認。近畿支部より育児休暇による休会希望あり、産休と同等とみなして承認。

【協議事項】

- ・ 準会員、協力会員にどのようなサービスを提供するか本部で取りまとめる必要がある。会員証は本部で発行する。
- ・ 電子投票についてアンケートを検討する。

【報告事項】

1. 2012年度決算状況について

2. 2013年度収支予算案の方針について

公益事業比率算定の按分が不明確である。

3. 総会対策（6/13）

③第1回支部広報委員長会議（5/21）（江川）

・ 内閣府より各支部のHPのトップページの体裁をそろえるようにとのこと。今後検討。

④第2回本部広報委員会（5/21）（江川）

・ 会員向けと対外向けのメルマガを別々に発行する。会員向けは毎月15日発行予定。

⑤CPD評議会（5/29）（塚本）

⑥第124回 建築家資格制度委員会（6/11）（植野）

・ 「社会制度ルート」と「JIA 正会員ルート」両方から国家資格化を目指す。

(2) 支部報告

①東海学生卒業設計コンクール2013 公開審査結果（吉川）

・ 6/1公開審査で6名の金賞、銀賞、佳作が決まり全国コンクールに進むことになった。

・ 次回はシーラカンスの赤松さんが審査委員長となる。

②会員増強委員会（6/14）（石田）

・ 準会員の入会を促すためにパンフレットなどを作成することを考える。当面支部で50名程度確保を目指す。準会員の権利や義務などを明確化する。ジュニア会員から正会員になるときの特典なども検討する。

③CPD評議会（6/14）（塚本）

・ 11件のプログラム申請があり9件を認定、2件に修正指示した。

④第1回 JIA 東海住宅建築賞2013 公開審査会（6/15）（吉元）

・ 47作品の応募があった。協賛も予定より多かった。

(3) 各地域会からの報告（各地域会長）

議事

1. 審議事項

①後援名義使用のお願い 講演会「スライド講演—失われた近代建築」(7/27) (日本建築学会東海支部) (水野) 承認

2. 協議事項

①2013年度役員会日程（水野）

②「ARCHITECT」法人協力会広告の件（水野）

・ 「ARCHITECT」の広告を愛知の法人協力会員で負担しているが、負担軽減の要望が出ている。静岡、岐阜、三重の法人協力会員にも負担してもらいたい。

・ 「ARCHITECT」は支部の機関誌なので4地域会で負担する方向で進めたい。

3. その他

①「第14回中部の未来創造大賞」募集について（中部の未来創造大賞推進協議会）（水野）

②「耐震診断・改修設計に係る業務量実態調査」への協力のお願い（国交省）（鳥居）

③NPO 建築家教育推進機構の助成金について（水野）

【監査意見】

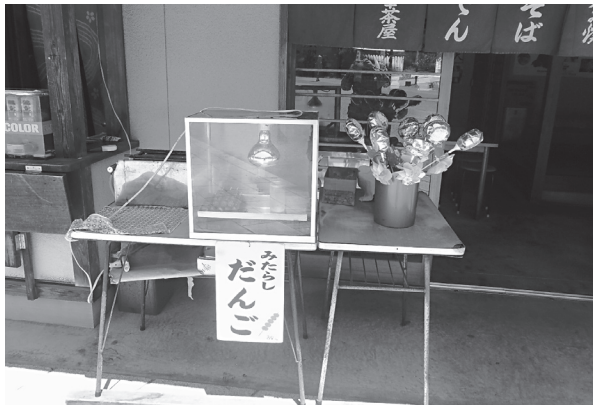
・ 公益事業比率の算定根拠が不明である。

・ 「ARCHITECT」は支部事業であるので各地域会で協力してほしい。



金華山のみたらし団子

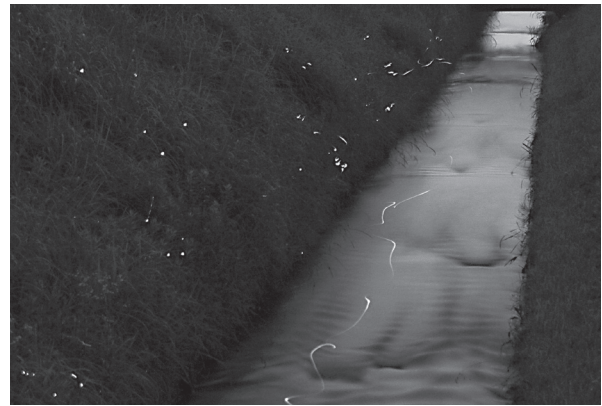
岐阜の金華山一帯は、昨年、国史跡に認定されました。そこで、金華山でおいしいみたらし団子の食べ方を伝授いたします。金華山には、幾つかの登山道がありますが、足に自信のある方はせひ登山道(やさしい七曲道が健脚向きの百曲道)で山頂を目指して下さい。30～40分で山頂手前のロープウエー山頂駅近くまで登ると城門前に売店(ろおぶ亭)があり、香ばしい匂いを周りに放っています。下の岐阜公園売店でも買えますが、ここで買って城のある山頂広場が展望レストラン屋上で、信長や道三も見たであろう景色を堪能しながら食します。足に不安のある方は、ロープウエーで登って下さい、ただし美味しさは半減します。運が良ければ、城門前で武将姿の戦国武士にも会えます。ちなみに売店(ろおぶ亭)は、夏季は休業中なので下の公園で購入して下さい。金華茶屋で、1本80円です。



金華茶屋の店先

本巢の源氏ホタル (期間限定)

わが事務所のある本巢市は、岐阜市西北に位置し自然環境に恵まれた自然と共生する街です。北部の薄墨桜や百名山に惜しくも漏れた能郷白山は全国的に有名ですが、初夏の風物詩であるホタルの生息地としても知られています。北部の山々を源泉とする清らかな水と住民の地道な保護活動のおかげで、市役所本庁舎近くのほたる公園や道の駅富有柿の里近くの席田(むしろだ)用水川沿いで、毎年5月下旬から6月初旬に源氏ホタルが多く見られます。この時期の日没後はファミリーやカップルの見物客で大いに賑わいます。私も今年は6月初めに目撃しました。カメラと技術不足でホタルの乱舞する様子はうまくお伝えできませんが、心安らぐほのかな螢火は誰の心にも強く残ると思います(市提供の乱舞写真を掲載します)。



間に浮かぶほたるの光 (本巢市提供)

地域会だより

<静岡>

- 7/18 7月静岡地域会役員会
- 8/8 8月静岡地域会拡大役員会
第1回建築ウォッチング(静岡ガス本社見学会)。静岡ガス本社
クッキングスタジオにて、簡単にできるつまみ料理教室と試食
会+ワインの夕べを開催。
- 8/23 静岡県東海地震対策土業連絡会へ出席

<愛知>

- 7/10 「アサダワタル講演会@尼ヶ坂」(「住み開き」について:住宅研究会)
- 7/12 H25愛知県木造住宅生産体制強化地域協議会
- 7/16 総務委員会
- 7/19 役員会(直前に同・幹部会) / 新入会員ガイダンス / 暑気払い
- 7/23 あいちトリエンナーレ関連企画ミーティング3(研修事業室主体)

<岐阜>

- 6/5 6月度役員会 参加者:10名 JIAの窓、建築塾2013について
- 6/21 第1回JIAの窓 18:00～21:30 コアにて JIA会員4名、一般
建築家6名、学生5名(合計15名) 地域のまちづくりについての
討論会
- 7/13 JIA建築塾 13:00～15:30 場所:岐阜女子短期大学4階講義室
講師:宇野享(すすむ)氏 題目:思考の継続と深度
* 付近のレストランにて講師との懇親茶会あり

<三重>

- 6/21 第2回例会(会員研修:建材研修会)
三菱マテリアル建材(株)(法人協会会員)による最新建材情報研修
会「耐力面材モイスTMの特徴と有効活用」
- 7/12 第3回役員会・第3回例会(会員研修:森羅万象匠塾)
「穂積製材所プロジェクト」見学、ディスカッション ～穂積亭、
山崎亮(studio-L)の取組～、暑気払い

暑中お見舞い申し上げます 2013年

(五十音順)

<p>(有) 柏 彌 紙 店</p> <p>代表取締役 尾関和成 名古屋市中区橋 1-4-6 TEL 052-331-8681 FAX 052-331-8891</p>	<p>サーマエンジニアリング(株)</p> <p>代表取締役 福田哲三 名古屋市中区丸の内 3-2-29 TEL 052-955-1455 FAX 052-971-1398</p>	<p>三協立山(株) 三協アルミ社 東海ビル建材支店</p> <p>支店長 山下勝彦 名古屋市中区栄 2-3-6 NBF 名古屋広小路ビル 8F TEL 052-265-8149 FAX 052-265-8196</p>
<p>(株) サ ン ゲ ッ</p> <p>取締役社長 日比祐市 名古屋市西区幅下 1-4-1 TEL 052-564-3111 FAX 052-564-3191</p>	<p>三 晃 金 属 工 業 (株) 名古屋支店</p> <p>取締役支店長 大内力男 名古屋市中区古渡町 18-9 角久ビル TEL 052-323-8621 FAX 052-339-1266</p>	<p>シ ン コ ー ル (株)</p> <p>代表取締役社長 池田_偉 名古屋市中川区供米田 2-1815 TEL 052-301-1811 FAX 052-304-0068</p>
<p>関 ケ 原 石 材 (株) 名古屋支店</p> <p>支店長 岩田有司 名古屋市千種区高見 2-13-4 TEL 052-761-5286 FAX 052-762-7063</p>	<p>総 合 資 格 学 院 名古屋校</p> <p>代表取締役 岸 隆司 名古屋市中区錦 1-2-22 中部資格ビル 1F TEL 052-202-1751 FAX 052-202-1755</p>	<p>T O T O (株)</p> <p>執行役員 中部支社長 本間健司 名古屋市中区栄 2-3-1 TEL 052-201-0201 FAX 052-221-0460</p>
<p>中 千 木 材 (有)</p> <p>取締役社長 千里泰三 徳島県阿南市羽ノ浦町古庄下向 9-1 TEL 0884-44-2025 FAX 0884-44-6335</p>	<p>(株) 野 村 商 店</p> <p>代表取締役 野村玲三 静岡県伊東市荻 578-216 TEL 0557-44-6600 FAX 0557-44-6618</p>	<p>パ ナ ソ ニ ッ ク (株) エコソリューションズ社</p> <p>名古屋照明 EC 所長 梶原浩史 名古屋市中村区名駅南 2-7-55 TEL 052-586-1061 FAX 052-581-7734</p>
<p>富 士 変 速 機 (株) パーキング事業部</p> <p>代表取締役社長 中島寿和 岐阜市中洲町 18 TEL 058-271-6597 FAX 058-271-6510</p>	<p>Y K K A P (株) 中部支社</p> <p>副支社長 岩田兼由 名古屋市中区栄 2-11-32 TEL 052-212-4401 FAX 052-212-4161</p>	

第30回 JIA 東海支部設計競技・応募要綱

課題 「きのこのような家」 (シリーズテーマ「風土」を見る)

●表現方法

- ・要求図面 大きさはA2判(420mm×594mm)1枚とする。
- ・図面には、氏名や暗号等目印となるものは記入しないこと。
- ・提案には、必ず居住空間を含むものとする。
- ・図面データ JPG形式(高解像度)またはPDF形式(高品位)

●応募資格

- <学生の部>大学、短大、高専、専修、専門学校、高校等の学生。
- <一般の部>制限はない。大学院生は一般。

●応募方法

専用の申込用紙に記入の上、図面とともに9月30日(月)17:00に事務局に必着のこと。

●提出先・問合せ先

〒460-0008 名古屋市中区栄4-3-26 昭和ビル5階

JIA 東海支部内 設計競技事務局 TEL: 052-263-4636

●審査委員(順不同・敬称略) ◎ゲスト審査員 ○審査委員長

◎前田圭介(UID一級建築士事務所)、○向口武志(名古屋市立大学)、謡口志保(ウタグチシホ建築アトリエ)、道家洋(道家洋建築設計事務所)、南川祐輝(南川祐輝建築事務所)、村林桂(村林桂建築設計事務所)、村松篤(村松篤設計事務所)

●審査会(公開審査)

2013年10月5日(土)10:00~

名古屋市立大学北千種キャンパス(名古屋市中区千種区北千種2-1-10)

●表彰式・作品展示・講評会・記念講演会

会場:名古屋大学(予定) 日時:2013年11月30日(土)

講演会定員:300名(先着順) 講師:前田圭介(建築家)

一柳の家族葬は 654,795円～

(日本建築家協会東海支部会員様会員割引価格)

紋朱子前机祭壇(柳1号)(枕花1対) 葬儀費用 726,930円の場合

祭壇から葬儀後に必要な後飾りまでの一切を含んだ
総額の表示をしております。

1. 表示金額は税込みです。一柳の斎場にて執り行う場合の金額となります。
2. 上記費用には、祭壇、棺、焼香用具、受付用品、葬儀飾り付けに必要なもの、ドライアイス1回、枕飾り用具、後飾り用具、後飾り生花1対、火葬料金と休憩所料金、寝台車料金(市内1回)、霊柩車料金、式場使用料(いちやなぎ斎場)が含まれております。
3. 2については標準的な数量・品質で用意していますが、食事、粗供養品など、数量・品質のご希望により変わるもの、また湯かんなどご利用いただくものは別途料金となります。
4. 宗教者へのお礼は別途になります。

◎ 宗教・宗派にかなった祭壇(価格)を200余种ご用意しております。

日本建築家協会東海支部会員様とご家族の皆様には、
葬儀基本価格の15%を割引いたします

いちやなぎ中央斎場

名古屋市千種区千種二丁目19番1号
TEL (052)745-1212
地下鉄桜通線「吹上駅」⑥番出口より西へ700m

駐車場 / 170台以上



いちやなぎ野並斎場

名古屋市天白区野並三丁目538番1号
TEL (052)899-0111
地下鉄桜通線「鳴子北駅」②番出口より西へすぐ

駐車場 / 100台以上



古くから受け継いできた葬送という文化
弔う事を今も大切に伝えます
信頼と真心の葬儀で130余年
一柳葬具總本店

安心して任せられるのは一柳です

一柳の「家族葬」



株式会社

創業130余年の伝統と実績

一柳葬具總本店

ISO 9001

品質マネジメントシステムの国際規格
JQA-QM4191

葬儀のお申し込み、お問い合わせ、事前相談は

TEL. 052-251-9296

365日
24時間
受付

<http://www.ichinaganagi-sougu.co.jp>

一柳葬具總本店

検索

編集後記

● 次回9月号の「ARCHITECT」は、300号になります。プリテン委員会でも300回の記念企画について話が盛り上がっています。私が、「ARCHITECT」に初めて執筆したのは1995年。会員随筆というページで毎月違った漢字一文字を題材に、その漢字に沿った内容の記事を書くというものでした。私に与えられた題材は、「装」。振り返るべく、事務所内を捜したのですが、唯一、FAXでいただいた依頼文書だけが残っているのみで、当時の原稿はどこからも出てきません。たしか、あらずじは、建築家を「装」ったある人物がさまざまな問題を引き起こし、本物の建築家にならなくては行けないと悟るといふ物語風仕立て。あれから、18年。本物の建築家とは何かを未だに模索しています。

(西出 章)

● 今月号にはJIA東海学生卒業設計コンクール第20回目の結果と、第1回目となる

JIA東海住宅建築賞の第1次審査結果が掲載されています。いずれも審査過程が公開で(後者は今後審査員による現地審査あり)、どのようにしてこの結果が導かれたのが誰の目にも明らかです。自分も心の中で審査員の問いかけに対してうなずいたり、ときには反発してみたり。参加したことのない方にはぜひ来年度、参加をお勧めしたいと思います。

大影佳史さんの連載「まちの風景」は今月で最終回となりました。身近な都市環境の魅力向上について多くの示唆をいただきました。

新たに始まったのが宿谷昌則さんの「自然・人間・建築と環境」です。耳慣れた「環境」という言葉を改めて丁寧に捉え直してみたいものです。

柳沢究さんの連載「インドの都市から考える」は次回10月号が最終回。今月号では人も牛も自然体のインドのお話が楽しいです。

(酒井直子)

おわび

「ARCHITECT」7月号編集後記の文中の、南山大学・神言神学院の改修について「当時現場監理をしていた設計担当者が」「十字架に名前を刻み」という文言は、新築当時の話であり、2012年の改修とは関係ありません。2012年の改修では、レーモンド氏の図面をもとに芸術家に十字架の制作を依頼し、設計者一同より神言神学院に寄付されました。名前を刻むことは一切ありません。誤解を招く表現がありましたことをおわび申し上げます。

ARCHITECT

第299号

発行日 2013.8.1 (毎月1回発行)

定価 380円

発行責任者 鳥居久保

編集責任者 吉元 学

編集 東海支部会報委員会

愛知地域会プリテン委員会

建築ジャーナル内

ARCHITECT 編集部

名古屋市中区栄 1-13-35

CSC HISAYA BLD.

TEL (052)971-7479 FAX 951-3130

発行所 (公社)日本建築家協会東海支部

名古屋市中区栄 4-3-26 昭和ビル

TEL (052)263-4636 FAX 251-8495

E-Mail : shibu@jia-tokai.org

<http://www.jia-tokai.org/>